
ヴェルダ神話物語

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴェルダ神話物語

【NZコード】

N53131

【作者名】

野狐

【あらすじ】

人に取り入ってばかりいる人は面白くない。人に助言することばかりに熱中して口うるさい人も面白くない。殻に閉じこもつて無関心な人も、自慢話ばかりする人も、法、法つて言う人も面白くない。でも全部の中心の人がいたつて面白くないだろうなあ。面白くない人たちを一度に集めてみたらどうだろう。きっと面白いだろうなあ。

『ゼフィー

ロの指輪』より

ヴェルダ神話物語へのアプローチ

『出典』

この神話・物語はアイスランドのゴーストマン諸島において、一七四四年にアイルランドの宣教師によつて発見された一冊の稿本によつて世に出ることとなつた。これは主に北ゲルマン語によつて書かれた全二十四の詩編であり、独立した神話と英雄譚から成つている。その後多くの研究者によつて同タイプの詩編が幾つか発見された。また同遺跡では古代バビロニア期のものとされる、シュメール語で書かれた粘土板も複数発見されており、解明の結果、神々による世界の創造から人類の誕生に渡る神話の物語が描かれていることが明らかとなつた。これらは後にこの場所に持ち込まれたものであるとの考えが妥当であるが、最初に発見された稿本との関連性も示しており、詩編、粘土板等を総称する呼び名として“古ヴェルダ”が採用された。

古ヴェルダが発見されてからの後、一九三七年にイギリス人考古学者アレックス・レンフリューによつて、イギリスのグラストンベリー修道院跡より大量の詩編が発見される。第二次世界大戦後によやくまとめられた詩編は北ゲルマン語によつて書かれたものであり、英雄たちの活躍が描かれた一代叙事詩は“ロアール・サガ（琥珀物語）”として世に広まつた。

『文学的構造』

これらの物語はそれぞれが異なった詩人によつて違う場所、違う年代に伝えられたものであるとされるため、そのことが物語の中に多少の矛盾点を産み出している。しかしながらそれは詩人たちの理想や憧れにより脚色されたものであると考えられており、物語の持つ本質を損害するものではない。

この神話・物語は全てが繋がりを持つており、多くの話があるものの、それらは一つの壮大な物語である。だが一つ一つの物語はそれぞれ固有の醍醐味を持っており、大きく展開して魅力的な多くの挿話を創り出している。

最初に神話の世界において大地の女神セレナが地上に降り立ち、最初の樹ヴェルダと世界が産まれる。ついで太陽神マストロが現れ、多くの命が産まれ、神々の統治による平和の世が訪れる。この時代は太陽時代と呼ばれ、文字通り太陽神であるマストロが全ての法として君臨し統治する時代である。

この時代は人間たち同士の戦争によつて幕を閉じることとなる。太陽時代、次第に神々以外の命が増え出し、特に人間がその数を増した。すると彼らは神々を崇め、崇拜することで自分たちへ引き込み、その力を利用しようとした。いわば神々による代理戦争であつた。見かねたマストロは人間たちへ怒りの炎を落とし、それにより一旦戦争は終結し、人間たちも生きるために神々を崇めるようになつた。

しかし力を求める邪な人間の欲望は、次第に神々から離れ淵界の魔王を求め、魔王たちもまた人間たちの欲望を糧に力を付けだした。魔王は神々への侵攻を開始し、神々はそれに応戦した。戦争は百年の間続き、大地は焼き払われ、多くの命が消えた。終わりの見えない

い戦争に恐怖を抱いた神々と魔王は、互いの内の一一番の賢者を交換し和議を結んだ。その後この戦争が人間たちの心内から産まれたものだと決定づけた神々の多くは地上を離れ、神話の時代は結びとなる。

続いて琥珀物語が始まる。全編六章と外伝から成る物語には王や騎士を中心とした王朝の栄枯盛衰が描かれ、特に古代王朝の変遷が取り上げられる。“ロアール・サガ（琥珀物語）”には多くのスカルド詩的な要素が見られ、登場人物たちの行動や感情が隠喩や比喩によって表現されている。また琥珀物語は、普通は英雄の物語として位置づけされているが、実際は人間同士の実像のドラマであり、恋愛や友情、怒りなど、現代の我々にも身近な感情が題材とされることにも注目されている。そんな彼ら物語の住人たちの儻く無常でありながらも活き活きとした生活こそが今日においても我々を縛り付けるのであろう。

これらの物語の詳しい年代は文献からは解明されていないが、古い神々を崇拜する詩人たちの間で詠い語られ続けてきたものと考えられ、神々による創造、王朝の台頭や衰退、英雄たちの冒険、また人々の生活を感じることが出来る。だが物語を知る主要な資料はこれまでであり、我々はこれ以上を知ることが出来ない。我々は、断片的な伝承、途切れた記憶、残された文献、産み出される技術、そして遙か彼方に思いを馳せる豊かな想像力によって出口に向かい暗闇の橋を渡るしかないのである。

→ 古ヴェルダ、ロアール・サガ（琥珀物語）への
アプローチ → より一部抜粋

波立つことを止め静まりかえる水と、目を覚ますことを止め静かに浮かぶ大地、それが世界の始まりでした。

その周りを「ディアファナモ」と呼ばれる分厚い氷壁の島が囲つており、噛みつくように冷たい空気が包んでいます。そこに光はなく、ただ風だけが吹いています。風は氷壁にぶつかり上下左右ともなく流れ、そして碎け散つていきました。「ディアファナモ」の壁は氷で広がる地は全てが雪でした。誰も何も生きていません。誰も何も生まれません。その果てには凍った湖「ディスクレータ」があり、「ディスクレータ」を中心として三つの氷山が囲っています。最も大きな力ポー、風の強いチエニ、滑らかなハルティネです。「ディスクレータ」の中には銀色の肌をした巨大なラストウロがいます。彼は氷の中でじっと待っています。そしていつか、彼を目覚めさせる者があるのならば、彼は力を貸して自由を手に入れようと考えているのです。話し相手は乱暴に吹き荒ぶ風だけでした。しかし風は何も答えようとしません。ラストウロもずっと前にもう飽きてしました。そして待っています。いつかきっとそうなるだろうと彼は信じて目を閉じていました。

「ディアファナモ」に囲われた水の中心には、目を覚ますことを止めた大地オスがあります。地表には何もいません。岩と砂が広がり、幾つもの亀裂が走っていました。またごつごつとした岩山が空へ向かってそびえ、不浄な大気がありました。大気は霧のようでもあり、煙のようでもあります。遠くまで見渡せず、ただただ荒涼としています。

オスの中心には巨大な湖があつて、それはセレネー^ヨと呼ばれていました。この周りだけは夏の南風のように優しい風が吹いていて穏やかです。セレネー^ヨの水は明るい緑と青色をしていて透き通つており、冷たく優しいものでした。オスの不浄な空気はこのセレネー^ヨの水に触れて、なだめられ、優しく抱かれ、清い透明な空気に変わるのでした。

これが世界でした。光るものはなく、草原を撫でる風の歌声も、満場の星の踊りも、鮮やかな幾本もの花の海も何もありません。ディアファナモの氷島とオスの大地、そして神聖なセレネー^ヨの湖だけでした。

セレネー^ヨの周りで戯れる風がぴたりと止んだ時、中空から一滴の滴が落ちてきました。それはセレネー^ヨの表面に波紋を描き出し、その音はオス中に響き渡りました。それに続いてオスに一人の女神セレナが舞い降りました。彼女はセレネー^ヨの湖の中に入るとそのまま眠りにつきました。この時、セレナは全てのものの母となり、また自身が大地となつたのです。彼女は自分の手の平に一本の木を植えて、それを最初の樹ヴェルダとしました。ここに植物が生まれたのです。

母がセレネー^ヨに浸かつて溢れ出た水は行き場を無くし、空へと上がると雲となりました。セレネー^ヨの水から生まれた雲は輝く雨を降らせ、母とオスを濡らします。それは十ヶ月の間続くことなりました。その雨に触れて、なだめられ、優しく抱かれ、霧のような煙のような大気は透き通つていくのです。

十ヶ月の後、雨が止むと黒く堅い空がゆっくりと一つに裂けて、そこには広い空とオスを見降ろす日の神マストロの姿がありました。彼は神たちの住む世界である神界から、オスに降り立つたセレナのことを聞き、やってきたのです。彼は湖に半身を沈めた大地の母の姿を遙か上から見ていました。

「尊大なる地の母よ、我の元へ来てはくれまいか？」
しかし母は首を振つて応えました。

「偉大なる日の王よ、私はこの場所からは動きません」セレネは続けました。「この大地は私の子供たちであり、また私自身でもあります」

マストロはセレナの姿と言葉に涙を流しました。それは輝く雨となつて十日間降り続きます。この涙は母セレネと大地オス、そして最初の樹ベルダをさらに潤すこととなりました。マストロはセレナに恋をしてしまったのです。マストロはこの後十回に渡り、セレネに自分の元へ来ることを望みました。最初の三度はセレナを暖かいその手で包みました。次の三度は暖かい言葉を投げかけました。次の三度は暖かい瞳を持つて待ちました。最後の一度は深紅の暖かい自らの髪を四本セレナに贈りました。セレナは穏やかな笑顔を持つて髪を受け取り、胸の中へしました。しかしながらやはりセレナはオスから離れようとはしません。

マストロは諦めず、セレナもまた少しずつマストロに惹かれました。二人は一日の内の半分の時間だけ会うことを約束しました。マストロが顔を出すとオスは光に照らされます。またマストロが顔を出していないときはオスは暗闇に包まれます。二人は一日の半分だけの時間を楽しみにし、また別れるのを悲しみました。こうしてこの世に昼と夜が生まれたのです。

さてマストロとセレナは毎日のように会い、日の王の暖かい光は大地母神を照らし、ヴェルダの樹を育てました。また日の王の暖かい光は世界を照らし、水溜まりを囲う「ディアファナモ」の氷壁を溶かしました。溶け出た水はオスの大地の亀裂に流れ込み、それは川となりました。最も広いウヌ、最も通り透きセレネーヨに近いトリ、最も深く流れの速いクヴィン、最も長い双子の川セプとナワー、そして最後に最も冷たいヌロです。

その周りのディアファナモとオスの大地を隔てる大きな水は「海」とされました。

川の畔では動くものがあります。多くの精霊たちが舞い踊つているのです。彼らは冷たいディアファナモの氷の中から誕生しました。冷たい氷から生まれた精霊たちにとつてマストロの暖かい光とセレナの柔らかな体は幸福そのものだったのです。

マストロは彼ら精霊たちに各自の体を持つことを許しました。マストロはヴェルダの樹に手をかざし、数枚の葉を摘み取ると、セレナは葉に息を吹きかけます。最初の一枚からは大きな緑色の鳥が生まれました。マストロとセレネは鳥を祝福し、彼に知恵と栄光、そしてモンドという名を与え、全ての生物の長となることを命じました。

モンドは大きく息を吸い込むと、巨大な翼をとじてマストロの前に頭を下げました。

次の四枚からは鳩、鳥、鷹、隼が生まれました。鳩は博愛と繁栄

の心を与えられた名前をフイラントロピオと、鳥は自由と復讐の心を与えられた名前をエンヴィーと、鷹は勝利と勇気の心を与えられた名前をクラーデヤと、隼は理想と希望の心を与えられ、そしてジョンティーラとこう名前を授かりました。

フイラントロピオ、クラージャ、ジョンティーラは各自翼をたためでマストロの前に頭を下げましたが、エンヴィーだけはそうしません。頭を下げるのを忘れてしましたのです。怒ったマストロはエンヴィーを、その黄色く光る瞳で睨みつけました。エンヴィーは慌てて翼をたたんで弁解しましたが許しはもらえず、黄色く光る瞳に焼かれ、以降その肌は、明るい場所であっても色を持つことを許されなくなりました。

セレナの手の平からは次々と落葉し、それらは馬となり牛となりました。樹の葉は落葉し、それらは山羊となり鹿となりました。こうして動物は生まれたのです。

マストロとセレナはモンドを除く最初の四羽をオスの四方の果てに送りました。そしてそれを 東 西 南 北 としました。それからマストロは川の岸辺で舞い踊る精霊たちを大勢捕まえて、ずっと高くへ持ち上げました。彼らには自らの光を少しづつ与え、星と名づけ、暗闇に包まれた夜の間、セレナが退屈しないように舞うことを命令したのです。あるものはその場で煌めいて、他には天を駆け巡るもの、空に絵を描くもの、様々です。

オスの大地にはディアファナモの氷の溶け水によって地表に川が流れていますが、マストロとセレネは西にある双子川セブとナウーで大地を仕切つて、生まれた動物たちをそこに住まわせました。その場所テ一口デオクツイデントに渡つた動物たちは皆、その西の土地に広がる短く生えた草を食べて過ごします。西の園にはエンヴィーが遣わされました。

とある日、マストロはセレネーヨの湖の岸まで降りてきて、セレナと語り合っていました。するとヴェルダの樹の足下に紅、紫、黄、橙の色を持った一本のルピナスの花が咲いているのを見つけました。

セレナが優しく人差し指を翳すとルピナスの花は八枚の花穂を地に落とし、それは四つの人間の腕と四つの人間の足となりました。続いて二つの花穂が落ち、それは人間の男の体と人間の女の体となつたのです。マストロはヴェルダの樹の皮から二つの人間の頭を創り出し、ルピナスの葉から髪の毛を創り出し、最後に二つの体に魂を吹き込んだのです。彼らこそが最初のオスの大地に生まれた人間でした。マストロとセレナは一人を、男をアビオ、女をオモトと名づけ、セレナは二人が夫婦として互いに愛し合う心を授けました。マストロはアビオにオモトを守り抜く力とイネの入った麻袋、ヴェルダの樹の枝から作った鍬を、オモトにアビオを支える力とセレネーヨの湖の底の泥から作った水瓶を与えました。二人は東の園テ一口デオリエントに渡り、最も広く、実りの多いウヌの川のほとりに住むことにしました。このころにはまだ法は存在していません。二人にとつては全ての広い大地が遠く高く美しく、森、海、草原も未知ばかりでした。アビオはヴェルダの鍬で土を耕しイネを植えて育てます。またウヌの川で釣りをして、それを持ち帰りました。オモトはアビオの捕つてきた木の実や魚を調理し、スープを作りました。東の園はフィラントロピオによつて守られています。

夜になると空には月が出ていますが、あれは空に昇った精霊たちの集合した姿でした。集合して一つになつた彼は「千にして一なる者」、「無限の命を持つ者」と呼ばれ、その美しさから「夜の貴族」とも呼ばれていました。名をミリアドといいます。彼は夜にセレナが退屈をしないように空へ昇り、満ち欠けによつて自らの形を変えて楽しませていましたが、彼もまた次第にセレナの尊大で美しい姿に恋い焦がれるようになりました。無理もありません。しかし彼は「偉大なる日の王」「太陽の神」マストロのこともまた尊敬していましたし、恐れていましたので、夜空で輝き、見下ろすことしかできませんでした。

夜の空を見れば分かりますが、彼は一人ではありません。西の土地テー・ローデオクツィデントから自身が寂しくならないように多くの動物たちを空へさらつてきたのです。どの動物も、夜に西の大地に流れるセプの川の水を飲んでいる所で、水面に映つたミリアドによつて連れ去られ、様々な星座となりました。彼はいつも象にまたがつていますが、その象は名をブルイといい、一本のとてつもなく大きな牙と黄色く光る体を持ち、いかなる時も足音を立てませんでした。

月は太陽にばれないようにそつと彼の後に続き、彼がいなくなつたと同時に空に姿を現してセレナを照らしました。そしてまた太陽が現れる時間になると、音もなく静かに西の空に隠れて行くのでした。太陽は月が大地に恋い焦がれていることを知りません。大地の

であるセレナは気づいていましたが、決してマストロには言いませんでした。それを言つてしまえば必ずマストロはミリアドをその黄色く光る瞳で睨みつけるでしょうし、ミリアドのことも哀れだと思つたからです。

世界はセレナによつて最初の植物が誕生し、川の流れによつて大地が形成され、海が始まり、初めての動物が生まれました。また最初の人間である男女が命を与えられたのです。昼と夜とが交互にやつてくる世界にはそれぞれ空に太陽と月が存在し、夜の空には精霊たちが舞い踊っています。大地には緑が芽吹くようになりましたし、空には雲も流れるようになりました。

ヴェルダから落葉し、大地に落ち、土へと帰つた葉はヴェルダの周辺に集まりました。マストロはこれらの土から小さな小虫や羽虫、人の姿に似せた小さな種族グロトニーを生み出しました。虫たちはオスの全土へ広がり、グロトニーたちはジョンティーラのいる北の大地に旅立ちました。

マストロは最後に、その見違えるように美しくなった大地に自分たちの国家を作ることに決めました。その場所はセレナがいる穏やかな湖セレネーヨの周り、透き通つた川トリの岸で、国の名をテ一口デディオといいます。豊かに広がる緑と風が吹き、水は澄んでいますが、何人たりとも通さない灰色の結界が、三匹のアルメトによつて張られていました。神たちの住む神界とは七色に伸びた道で繋がれ、セレネーヨの岸辺には巨大な館が建てられたのです。神界に住む神たちは七色の道を通りテ一口デディオに移り住みました。もちろん全ての神ではありませんが、どの神も女神もこの場所が気に入らないものはいません。最も気高く高貴な神、日の王マストロもまた移り住んだ一人ですが、大地を照らす仕事がありますから一日の半分だけしか館にはいませんでした。

こうして起こつたことが世界を誕生させた経緯です。しかしながら世はそれ自体が一つの魂フェオデバルコであり、ディアファナモもオスもテ一口デディオも、もちろん神界もまたフェオデバルコの

上に広がっている光景なのです。魂はその上で誕生し、失われていきます。イネの流れる音や風が草と草の間を吹き抜ける音は、誰にも気づかれなくとも静かになつて消えていきます。しかしフェオデバルコの魂だけは失われません。全ての素であり、それは永久に存在し続ける生命なのです。

アルタロ丘の戦い その一

世はフィオーデバルコの魂の上に成り立っていますが、その上で世は大きく三つに別れています。偉大な神々の住まう世である神界。オスの大地、ディアファナモの氷島が広がる世界。そして強大な力を持つ王たちの住まう淵界です。神界は天の最も高いところに存在し、トウーロデディオと呼ばれる輝く塔が建っていました。神たちはそこに住まい、美酒を酌み交わし、舞い踊りしています。またこの世の最も深いところには淵界が広がり、強大な王たちが鋳つた金属のように煮え立つ酒を煽り、肉を飲み込んでいるのです。そしてその間に挟まれ存在する世こそが世界です。

これからお話しする話はこの世界に神が降り立ち、光が差すずっと前の出来事です。風が唄い、花が芽吹き、草の海が波を立て流れずつと前の話です。

その昔、偉大な神たちも強大な王たちも、元々は二つの種族共に共存しており、この世界に住んでいました。

ある時のこと、王の一人 大食の王 レマンディは 日の王 の館に招かれて食事をしていました。レマンディは出された六十頭分の豚と牛の肉、八十杯の樽酒を、その三つの巨大な口と両手の平に開いた口を使って全て一飲みにしてしまいました。続いて葡萄、林檎など全ての果物を飲み込みましたが、レマンディの空腹は治まりません。レマンディはマストロの館の外へ出ると、庭に育った楊梅の木と葡萄の木をその根っこごと飲みこみました。慌てたマストロ

は使いのポルティたちにレマンディを止めるように言い遣いました。ところが何とレマンディはポルティたちをも両手の口を使って飲み込んでしまったのです。マストロは激しい嫌悪の念を込めてレマンディを見やりました。そして他の神たちと相談して、このままでは世の中の食料が尽きてしまう、全ての生物が息絶えてしまう、とう考え、レマンディを捕らえなければならぬと決めたのです。神たちはレマンディが湖に水を飲みに顔を覗かせたとき、水中へ突き落とし 水の主人 荒ぶる透明の神 バス=オランドの力により水を凍らせて、レマンディを閉じこめてしまいました。

レマンディは再三に渡り叫びましたが氷の外へは声は届きません。次第に空腹により力をなくし、最初の間は氷を舐めていましたが、最期には大人しくなつてしましました。ですがレマンディの腹から鳴る音だけは止めようがありません。低い唸りを上げて、それは猛獸のものとも地響きとも聞こえました。神たちは流石にこの音には耐えられなく、ついにバス=オランドは氷を溶かしてレマンディを外に出してやつたのです。

レマンディは十の山と草原の草を食い尽くし、森の木をなぎ倒しながら他の王たちの元へと帰りました。レマンディの話を聞いた強大な王たちはたちまち怒り 憤怒の王 漆黒の角を持つ君主であるニグラボ=エニグモは神たちとの戦いを決意しました。そして王たちと、彼らに使える異形の者を集め、使いの者たちを集結させました。しかしながら神たちもまた王たちが戦争を仕掛けようとしていることを見逃しませんでした。マストロは館に主だった神たちを集め、態勢を整えてアルタロの丘で待ちかまえました。そして大地の一度の反転の後、地響きと共に王たちの群れが丘に迫つて来るど、そこへ戦闘神リュー・ポが彼の持つ大剣を投げ込みました。彼は雷雲の若き狼 と呼ばれ、他の神と比べてもその力は三倍はあるとも言われていました。投げ込まれた彼の剣は一直線に王たちの群れの中を進み、邪淫の王 の目を貫き、地面へ刺さつて大穴を開けるとようやく止まったのでした。

そうして彼の剣が合図となるやつにして五年続く戦争が始まりました。

アルタロ丘の戦い その一

最初リューポの投げた剣により王たちは怯み、神たちの軍が優勢に戦いを進めました。丘の上ではアミコレトたちが陣を組んで防御壁を築き、並んだポルティたちは矢を放ち、王たちの群を射抜いていきました。さらにマストロがその輝く瞳で睨みつけますと異形の者たちはたまらない様子でその場に倒れてしまいました。

リューポと彼に使えるポルティたちは雲に乗って戦場を駆け巡りました。リューポの銀色の髪の毛が後ろへなびいていましたので、それは銀色の流れる川のようでした。リューポは丘に舞い戻り一休みしただけで、またすぐに戦場に向かって進んでいくのです。

しかしながら王たちの群も黙つてはいません。憤怒の王が大声で雄叫びを上げますと、ポルティたちは震え上がりましたし、レマンディはここぞとばかりに彼の持つ五つの口で神たちの軍勢を飲み込んで自らの腹を満たしました。

戦闘神リューポの進軍を止めたのは 暴力の王 です。彼はヒルタ、またの名をヴァギンといい、五十の魂が戦場で失われ血が流れたとき、一人の勇猛な戦士と高貴な二人の侯爵、三つの軍を連れて戦場を彷徨う戦士です。身の丈の一倍もある朱色の槍を持ち、目玉のない青鹿毛の雄牛にまたがっています。これによりリューポは暴力の王との戦いに手一杯になり、王たちの軍勢が巻き返しを始めました。

ですがもともと攻撃に優れる王の群勢と、防御に優れる神の軍勢ですから、すぐにお互い決着はつかないものだと悟ったのです。そして百年経ち荒廃し、音の無くなつていく世界を見て、このまま争

い続けるのは互いの利益にはならないし、疲れ果ててまでやるのは誰もが賛成しませんでした。それに彼らは思ったのです。どうして争いが始まったのか？しかし覚えている者はいませんでした。

そこでお互に話し合いでより解決することに決めたのでした。両軍は世界の果てに住む二人の賢者に仲介を申し出ました。彼らならば鋭い洞察力と正しい選択によつて導いてくれるであろうと考えたのです。神たちの為にはビロードのような髪を持つ長身の 右の空の賢者 が、王たちの為には褐色の肌を持ち、せむしの背の 左の空の賢者 がそれぞれ立ち上がりました。賢者たちに任せる見返りとして、マストロは右の手首の骨を、ニグラボ＝エグニモは自らの右の踵の骨を賢者たちに差し出しました。

神たちは賢者をもてなし、彼を円卓の中心に囲んで意見を待ちました。右の空の賢者は言いました。「法を守り、慈しみの心を持つて生きる神たちにとって王たちの存在は憎く、また邪悪である。よつてこの場から去るのが適当である」と。神たちはなるほどと大きく頷き、手を叩きならしました。

一方で王たちは賢者をもてなし、彼を一番高い椅子に座らせて意見を待ちました。左の空の賢者は言いました。「思うがままを好み、欲の素晴らしさを求め生きる王たちにとって神たちの存在は煩わしく、また邪悪である。よつてこの場から去るのが適当である」と。王たちはなるほどと大きく頷き、足を踏みならしました。

こうして二人の賢者のおかげで戦いは終わり、また平和のために互いに世界を離れるのが妥当であると考えたのです。神たちはすぐに最も高い所へ神界を築くべく、多くのものを連れ立つて高く高くへ上つていきました。また王たちは世界から深く深くへと多くを連れ立つて移住を始め、後に淵界を造り上げたのでした。

神たちは 右の空の賢者 を自分たちの元へと招き入れ丁重にもてなしたため、気分のよくなつた 右の空の賢者は、神たちの中で最も年長者であるマストロに、この世の真実の書かれたイチジクの実を与えたのでした。食べれば全てを知ることができる実ですが、

食べれば世の最期が分かつてしまう為に誰もが恐れて食べることのない実です。マストロは黄金色の箱にその実をしまい、箱を暖炉の中へと隠しました。そして暖炉の火を絶やさないよう命じたのです。

王たちは 左の空の賢者 に対して、戦いが終わった今もう用はなくなつたので、せむしの賢者 を槍で串刺しにして一度と上つてくることのできない淵界の谷に突き落としてしまいました。王たちは セムシの賢者 が力も持つていないので偉そうな態度を取るのに怒りを覚えており、ついに牙を剥いたのです。よつて王たちが真実のイチヂクを手に入れる事はありませんでした。しかし王達は全てを知るイチヂクなど欲しくはなかつたのです。欲望のままに生きる彼らにしてみれば、明日も好き勝手に生きて、それは明後日も同じことですから。お腹が空けば欲しくなるでしょうが・・・

さて大地に刺さつたリューポの剣は大穴を開けましたが、その大穴には戦いによって流れた大量の血が流れ込み、渦を巻きました。それは神と王の二つの神族が去った後にゆっくりと時間をかけて穏やかになり、やがて血の色が抜けていくと、神聖な湖セレネーヨとなりました。ですが世界を去つた神と王の二つの種族はこのことは知りません。新たな世で国を築き生活を始めるに、ずっと後にセレナがこの世界へ降り立つまで、その存在は少しづつ忘れられていきました。

ディフィーロ（マストロの別の呼び名）を中心とした神々が大地に君臨する太陽時代の話。これは時の循環からみれば遙かに昔のことです。

神々が大地に降り立ち、自分たちの国家を築いてしばらくのあと、大地には平和が訪れました。咲く花は色とりどりで、歌う鳥は様々であり、また神々の国に張られたアミコレトたちの防壁は頑丈そのものでした。

ある暁の時間がやつてきた朝のことでした。いつものようにセレナに会うために空から顔を覗かせて 太陽の守護者 主なる者は大地に降り立ちました。テーゴデディオでは神たちはまだ眠っていましたし、西の土地でも眠っている大勢の動物たちは眠っています。ミリアドは静かに西の空に隠れようとしています。東の土地ではアビオは早くから起きて漁へ出かける準備をしていましたが、オモトはまだ眠っていました。

マストロは夜中ずっとセレナのことを考えていましたからすぐに会いたいと思いました。しかし神々の館の寝室へ入るとそこにはセレナはいませんでした。マストロは眠っていた 水の守護者 バス "オランド"と、剣の神であり銀色の義手を持つ名工でもあるスタルを叩き起こして場所を聞きましたが一人共にすぐ首を振りました。

彼は跳ね上がるような活気を無くし、また心配は光を弱らせました。彼の髪はもつれて息は上がりました。よつやくしてマストロは館を出て湖の岸を歩いていますと、朝靄の向こう側でセレナが岸边

の草に藁を敷いて腰を降ろしているのを見つけました。マストロは喜びと怒りの混じった様子でセレナに近づいて行きますと、こう話しかけたのです。「おお、我が妻セレナよ、誰にも告げず黙つて館を抜けるとはどういうことか？心配するではないか」と。

「申し訳ありませんマストロ、しかし聞いて下さい」セレナは申し訳のない表情でマストロを見上げながらそう言い返しました。そのセレナの胸からは淡い金色の光が漏れだしているのをマストロは見つけました。

マストロは覗き込みながら言いました。「何があつたんだね？」
「あなた様からいただいた四本の髪の毛ですよ。私はずっと胸の中で暖めておりました。ようやく我らの子供たちとして誕生するのですよ」そう言ってセレナは深紅の髪の毛四本を膝の上に一列に並べたのです。

マストロは口元をほこりばせながらうなずきました。

二人は連れだって神々の館の寝室に帰りました。この頃にはもう空は青さを取り戻しておりましたし、他の神々たちも動物たちも目を覚ましています。しかし子供たちはなかなか生まれませんでした。「どうしたことか？」マストロは気が狂つたように寝室の中を歩き回りました。他の神々たちも何事かと代わる代わる寝室に顔を出す有様でした。マストロが心配をして空へと戻らないために夜は訪れるることはありませんでした。

ひどく心配した日の王でしたが、彼は全ての生物の主であり 月明かりの森に住む梟モンドに知恵を授かることを思いつきました。日の王はすぐに淵界と世界の境目に遠征に出ている 雲を駆る者リューポを呼び寄せると、共に森へと出発していきました。マストロは館を振り返り見つめました。館は灰色に佇んでいて、寝室の窓からは淡く柔らかい灯りが漏れています。優しいその光は穏やかで神秘的でした。

月明かりの森は 西の土地と北の土地のちょうど中間点にあります、大木が生い茂つていて、太陽が大地を照らしている間にも

薄暗く、異形の怪物が住んでいると言われている森なのです。一人は森の中に足を踏み入れましたが、冷ややかな風が吹いていて、まるで森全体が恐ろしく巨大な怪物の口のようにも見えました。しかし 日の王 と 雷雲の狼 は恐れることなくその黄色い目を光らせ、銀色の髪を逆立てて森の奥深くへ進み入りました。とくにリューポは雄叫びを上げて、手にした剣を振りかざし進みました。森の中に隠れ住む異形の住人たちも流石にこの一人には恐れをなして大木の陰や洞穴の中へ隠れてしまいました。

「ひどく暗い場所だ」リュー・ポは愚痴を発しました。「それにひどい匂いだ」

「誰も来ることのない場所だよ」マストロが言いました。
「こんな所に 知恵の大鳥 が住んでいるとは思えないね」ヒューポが吐き捨てます。

「モンドはこの先にいる」マストロは言います。「彼は何でも知っている。わしらの為にきっとよい方法を考えついてくれるだろう」一人がさらに森深くに進むと、一際大きくずんぐりとした大木の下に小さなランプが一つ光っている場所に出ました。見上げますと木の枝には光る一つの丸い灯りが浮かんでいます。彼こそが 月明かりの森の主 モンドです。

「よくぞいらっしゃいました」モンドは枝からひらりと舞い降り、二人の前に姿を現しました。

「モンドよ、我らはお前に知恵をもらって来た」マストロが前へ出ます。

「私の知恵でよければいくらでもお貸しすることができますよ」モンドは言いました。

「それから一食分の食べ物と一杯の樽酒を、明日の食べ物をくれることはできないかね?」とリュー・ポは言いました。何しろ急な遠征だったものですから二人共にあまり食事を取つてはいいのです。リュー・ポはもう腹ペこでした。

「もちろんですよ。樽酒に山羊と豚の肉も」用意できます。森の

木の実も」用意しましょ「 モンドは切り株の机にすぐに食事を用意し、二人の神は喉を鳴らしながら一心に食事を食べました。リューポは全てがもったいないと思い、焼ける前の肉を食べ、滴る肉汁さえも飲みました。お腹が空くとこうことば、どうやら田の前のことを忘れることがあります。

「わしの子たちを誕生させるためにはどうしたらよいか、よい知恵はないかね」食事が終わるとマストロはされました。

「その代わりに私に消えることのない魔法の灯火をお与え下さい」モンドは言います。

「よろしい、分かった」マストロは枝に掛かった今にも消えそうなランプの炎に手をかざし、まじないを唱えました。するとランプの炎は一度大きく燃え上がったかと思うと揺らめくのをぴたりと止め、そのまま凍り付いたように動かなくなり辺りを照らしました。「方法はあるかね？」

「それならよい方法がありますよ」モンドが言います。「まず子供たちが生まれるにはあなた様の太陽の光と月の明かりが必要なのです。しかし心配が故にあなた様がこの地にとどまっている為、月の夜は訪れません。あなた様が時を止めているのです」

マストロはテープルを叩いて立ち上がりました。その顔は怒りに満ちています。「ではこのわしが原因だというのか?」

「では子供たちは助けることはできませんよ」モンドは田の王の前にも引かず応えました。

マストロはしばらく考えましたが、最年長の神は思慮深く、頭もいいのです。この問題を解決できるのはモンドしかいないことは分かつていましたから、体中に巡った血を大人しくさせると椅子へ座りました。

「子供のためになら親の感情などどうともなるわ!」マストロは息を吐きました。「ではモンドよ、わしはどうすればよいのだ?」

「四つの髪をテー口デディオの館の中で最も月明かりの当たる窓際に添え、正しい時間だけ日の光と月の明かりを交互に当てていかな

ければなりません。その与える祝福により五日田の暁の時、四人の祝福されし子供たちは生まれるでしょう」とモンドは言います。

「祝福とは何だね?」とマストロが言います。

「祝福とは子供たちを包む布のことです。それはライオンのたてがみ、渡り鳥の涙、鼠のまつげ、月明かりの森の影からできている祝福の布なのです」

それを聞いたマストロがリューポに伝えると、リューポはにやりとして彼の雲をもの凄い速さで駆り立てました。そして半日もしない間にライオンのたてがみ、渡り鳥の涙、鼠のまつげを手に入れて戻ってきました。しかしどしても月明かりの森の影だけは手に入れることができません。手の中へ影を入れて森の外へ出ると、日の光によつて影は消えてしまいます。

「影を外に持ち出すのなんて無理なことだ!」リューポは叫びました。「影には影の居場所があるのだから!」

「影を持ち出すによい方法はあるかね?」眉を曲げながらマストロは言いました。

「その代わりに私に書いても書いても書ききる」とのない魔法の本をお『え下さい』モンドは言います。

「よひしい、分かつた」マストロはモンドの持つ古びた本を手にすると手をかざしまじないを唱えました。本はバラバラと音を立ててページがめぐり上がり、ぴたりと止まりました。「方法はあるかね?」

「それならよい方法がありますよ」モンドが言います。「あなた様の知りうる中で最高の腕を持つ職人によって作られた箱に影を閉じこめるのです。箱はこの森で生まれた木よりできたものでなければなりません。影をその中で眠らせるのです」

そこでマストロは神々の中で最も優れた技術を持つ、銀の腕を持つ名工・スタイルを呼びよせて月明かりの森の中で育つた木を使って一つの木の箱をこしらえました。これにより森の外へ出たとしても影が逃げ出すことはありません。その中に全ての材料を詰め込むと、

三人の神たちは神々の土地へ帰ることにしました。

三人の神は興奮した様子で大急ぎにテー・ロ^テ・ディオへ向かいました。空を跳ね上がるような速さで大股に駆けていったものですから、空が真っ二つに割れたかのように雲がなびいて大地は地震のように揺れました。空にできた雲の道からは大粒の雨が降り注ぎ、その下の土地へ狩りに出ていた人間たちには空が泣いているか、もしくは怒っているかのようにも思えました。

もと来た道を、三人の神たちはその彼方へ姿が霧のように見えなくなるまで進んでいきました。モンドは森の出口まで出てきて神たちを見送りました。高台の丘を下り、一日の内の半分以上も休むことなく歩き続け、木々に挟まれた道を抜けると、三匹のアミコレトが三角の形に囲む神々の庭、神々の住まいであるテーゴデティオが見えてきたのです。神々の屋敷の窓からは、三人の神の帰りを今か今かと待ち望む神々が身を乗り出しています。あまりにも乗り出すものですから、窓から落ちてしまいそうなものもいます。

旅人たちは嬉しそうに、そして誇らしげにして門へ続く道を進みました。そしてマストロは「さあわしの息子達に会つことが出来るぞ」と自らの鬚を撫でながら、それと同じくして、モンドの言葉を繰り返し思い出していました。

「その子供たちが生まれることになるのは誰のおかげかね?やはりこの俺の素晴らしい腕つぶしがあったからではないか」マストロの友人であるリュー・ポはやりとしながら背中に負ふった剣を鳴らしました。リュー・ポは前へ出て門を両手で押し進みます。リュー・ポはテーゴデティオの神々の館へ入つていきました。その後に影を入れた箱を持つ銀色の腕のタルが続きました。マストロは一度屋敷を見上げた後、屋敷の中へ入つていきました。

屋敷の中ではほとんどの神がセレナの寝室に集まつていました。壁際に椅子を並べて大きな神も小さな神も女神も若い神も皆が座っていました。セレナはベッドの上に寝そべって、胸に光る髪を抱え

て静かに笑っています。

「三人が帰つたぞ」一人の神が叫びました。その声は不安を含んだ声色でいかにも怯えているようでした。つまりもしかしたらモンドの知恵を持つても子供たちを誕生させる方法が見つかならなかったのかも知れないと考えたのです。「新たな命は・・・」

神たちの言葉をリューポは切り落とすかのように遮り、腕を高く上げて言いました。「案ずることではない。我々は見つけたのだ！それにこの中にそれと同じ行いができるものがいるのかね？」彼は自信満々に言い、見渡しました。

すると今度はこれまで黙っていたスタルが進み出て言いました。「リューポよ、君はほんどこの行いが自分自身の力によるものだと、そう思つているようだが、それはどうかな？私が月明かりの森で育つた木を使ってこの箱を創り出さなければ、君の力だけではどうしようもなかつたのではないか？」

リューポは憤慨して顔を赤らめました。しかしリューポはそれもそうだと分かつていたものですから、悔しそうにスタルの銀色の腕を睨みつけていたばかりでそれ以上は言い返すことは出来ませんでした。寝室の中はざわついており、セレナも心配そうにしていましたが、二人の様子を見て口を開いたのです。「二人ともどうしたのです？この行いが達成できたのは、リューポ、あなたのここにいる誰よりも強く逞しい力のおかげであり、また、スタル、あなたのここにいる誰よりも巧みで優れた技のおかげではありませんか？私は二人共に感謝いたしますよ」

後に遅れてマストロが寝室に入つていきました。そして日の王は皆の様子と聞こえてきたセレナの声から事の次第を察すると、リューポとスタルの前に立ちこゝう言つたのです。「セレナの言つとおりだ、わしの力強い友よ。お前たちの力と技がなければ何もできなかつたのだぞ？争うこともない」

二人の神は全くそうだと気づきました。そして恥ずかしそうにすると、うなずいてマストロの後ろに横に並びました。マストロとそ

の仲間たちはセレナの横たわるベッドへ歩きより、その横へ跪きました。そしてマストロは「わしの子供たちよ、五日後の後会うことを約束しよつ」とそう言つと、窓を開けて空高くへ昇つていきました。リューポはセレナのベッドを屋敷の中で最も月明かりの美しく当たる寝室の窓際に置き、タルは祝福の衣を他の女神の力を借りて紡ぐと、それで髪を包み込みました。

さて、後はモンドの言つ通り、正しい時間だけ日の光と月の明かりを交互に当てることで、五田目の暁の時間に祝福の衣に包まれた神聖な四人の子供たちは生まれるはずです。そしてそれはその通りになりました。神々の館の中には暁の時、幼い四つの子供の泣き声が響き渡つたのです。それは全ての神を夢から覚ましました。マストロは子供の生誕に喜んで、その場を離れようとしたか

ら、しばらくの間夜らしい夜は訪れませんでした。

女の子の姿を持つ笛吹の神アーロはホルンを吹き鳴らしながらテーコ・デ・ディオの草の上を、木の上を、屋敷の屋根を、屋敷の床上を駆け回りました。彼女は祝福の時にしかホルンを吹き鳴らしませんが、それは神々の誰にとってもまさに祝福でした。子供たちは四人とも、その赤ん坊の姿があまりにも似ていたものですから、どの赤ん坊もミユルタリドと呼ばされました。

子供たちの側には常にマストロかもしくはセレナの手が添えられており、優しく触っていました。マストロは四人の子供たちを抱えて「わしの命はお前たちの命でもあるのだろうな。もしもこの先長い道中進むとしても、わしが見つめるのは四人同時じゃ」そう満足そうに言つたのです。

四人の赤ん坊はまたもや泣き出し、その声はしばらくの間屋敷の壁に反響して残つていました。しかしそれもまた實に心地よく聞こえるのでした。

母は子供たちの頬を優しくなでおろしながら言いました。
「まあお前達、そんなに嬉しいのですか？」

ヴェントの唄 その一

「オスの大地 美しき我らが谷」

漂う音と光は 静かに潜み
広がる土も 空仰ぎ見る
一筋の光は 優しく降りぬ
新しき始まりを歌え大きく
今より命の尊くあれと

冷たく深き水は ただたゆたい
元の命 息ふき育つ
陽の落とす涙は 大地潤す
新しき始まりを歌え大きく
今より命の尊くあれと

生まれし魂の舞は 眠りのじじま
生まれし世界 広く美しく
鮮やかなる種の火 永久の理
新しき始まりを歌え大きく

今より命の尊くあれと

「湖の女神セレナ」

美しき女神の岸辺に立ちて
優しくすくう水の清さを
その口に含みて漏れる吐息の
避け得ぬ魔法に身は揺らめき踊る

暁の時にその眼に捕らえるに
知らねど先に何かを恋ゆる
静かな霧深き湖畔歩き見て
憧れの心を微笑むあなたに歌う

博愛と慈愛を持ちて東を向き

自由な心は西の果て

勝利と勇気の約束は南の地で果たし
北に向かいて希望と理想をかなえん

「私はその輪で踊る」

歌う草原も我がふるれと
鳥のさえずり 永遠を望む
風は友人 山は寝床
明日願い眠る おおその輪
樂しや 楽し

詩読む岩は我が椅子
潮騒の音色 永遠を望む
海は友人 浜は寝床
愛し抱き眠る おおその輪
嬉しや 嬉し

この世の土台を担つてているのはフィオデバルコの魂です。神族も王族も人間もその他の動物も全てのもの下にはフィオデバルコの魂が存在しており、それは全てを乗せた舟なのです。フィオデバルコの一番目の底には一匹の雄鹿であるアルコーがいて、絶えず二匹して飛び回っています。彼らが跳ね回ると、一匹の角からは風がひゅうひゅうと吹き出し、その風は音を奏でました。また一匹の角から色が流れ出し、フィオデバルコの魂とその上に広がる世界を鮮やかに彩りました。そんな彼らの様子を見ながら一匹の灰色鼠がフィオデバルコの底板を絶えずかじっています。それからアルコーたちに見つかる前にすばしっこく走り、場所を変えてはまた別の場所の底板をかじり、少しづつ穴を開けようとしているのです。

全ての生物がフィオデバルコを必要としています。フィオデバルコの一番目の底である淵界の王の一人、暴力の王 ヴァギンのまたがる青鹿毛の雄牛は、大地から生えた黒岩に 邪淫の王 が精子をかけたために生まれたものでした。黒岩はそれ自体がフィオデバルコから生えてきているものであり、切り離された一部といつても良いのかもしれません。これはこの場所が淵界となる前、神族と王族の戦いの前のことです。

オスの大地に移り住んだ神族たちにしてもなくてはならないものです。二つの底のある大地、その美しい自然が広がるのは紛れもなくフィオデバルコの上のできこと。そこには清い水が流れますし、さわやかな風が吹き、全ての生きとし生けるものに対して優しくあるのは、言うまでもありません。またディアファナモの冷たい氷の大地をそなえ、こうこうと風を吹かせては、全てのものに対し

て厳しくもあるのです。

そんな底にある淵界とその上の世界、この二つを繋いでいるのは月明かりの森です。いつも薄暗く不気味な感じのする森ですが、しかし時折光を浴びて反射する木々の枝は、黄色や薄い緑色に輝き、幻想的な姿を見せる森です。そこには賢い梟モンドが住んでいます。その森はモンドによつて守られていて、森が暗いのは森 자체が眠つているからなのかも知れません。多くのものがモンドに知恵を授かるうとし、またモンドと知恵比べをしようとし、また全ての生物の主であるモンドの話を聞こうとして月明かりの森を尋ねましたが、ほとんどのものは辿り着けずに引き返すか、森の中を彷徨つてそのまま死んでしまうかしかありませんでした。運良くモンドのねぐらに辿り着けても、彼は会つに値するものかどうか、その丸く大きな目で見透かしていますので、偶然辿り着けたとしても空高く飛び立つてしまつて会つことは叶いませんでした。

モンドの知恵 その一

ある時のこと、北の洞穴に住むグロトニーの一人アスペクティがモンドを尋ねて月明かりの森へ足を踏み入れました。彼は自分の頭に絶対の自信を持つていましたし、この世に知らないことなどはないと思つていました。グロトニー族の中で最も優れた知識を持つ彼は自信家で頭でっかちなグロトニーでした。彼はモンドの噂を聞きつけて、どれほどのものか知りたくなつたのです。そして自分の方が上だと知らしめたかつたのです。アスペクティ自身には力はありませんでしたから、異形の者たちに食い殺されることのないように、彼らの嫌がるオリーブの葉で紡いだ服を着て森へ入りました。また流石の彼でもモンドの居場所を知つてはいませんでしたから、長い時間が経つても大丈夫なように二頭立ての馬車に食料を積み込み、それらにも全てオリーブの装飾を施すという準備も怠りませんでした。長い時間の後でした。日の主人マストロの守護する太陽が何度空へ昇つて沈んでいったのか分かりません。森の中からは外がどうなつているのかは全く分からぬのです。馬車の食料も半分以上は尽きました。馬も疲弊しきつっていました。そして偶然に一息つこうと止まつたところがモンドの住む巨木の下だつたのです。アスペクティがあつと確認するまもなく、頭上で小さなランプが灯りました。そしてさらに大きな丸い二つの光が灯り、馬車とアスペクティの前に舞い降りたのです。それはモンドでした。モンドはアスペクティとは会うに相応しいと判断したのでした。

「あなたが全て知識を持つモンドかね？わしの名はアスペクティ。

あなたより知識の深いグロトニーさね アスペクティはモンドを前にしてふてぶてしく言い放ちました。

「いかにも、わたしはこの森の主モンド」モンドは言いました。

「会えて光榮ですな」アスペクティは薄ら笑いを浮かべて言います。「だがね、あなたの話をここまで聞きに来たのだ。全ての生物の主であるあなたの話、ぜひ聞かせてはもらえないかな? 大体あなたは何を知っている?」

賢いグロトニーのアスペクティはモンドがどう答えるのかを待ちましたが、一方では誰も会うことが出来ないといわれるモンドに出会ったこと、それだけで彼は大変な満足感を覚えていました。

小さなグロトニーの大変に失礼な物言いでしたが、モンドは落ち着いていました。彼は艶のある緑の翼を整え、ゆっくりと始めました。

「私が知っているのはこの世のこと、それはすでに過ぎ去った時間の中に存在していたことであり、またまだ存在してはいない生まれてくる出来事のことである。私は考え新たに生み出すことができる。私は光の届かぬこの場所から静かに見つめ、そして命を見守る。私には誰も会いに来ないし、私は会わない。空からの光は慰めとなるが私は必要としない。我が主らの言葉こそが慰めとなるのである。私が闇の森に生きること、それは永遠の想像は闇の中にこそ存在すると考えているからである。

知恵は私の中にある。右の空の賢者テクストの息子、命あるイチジクの樹よりもぎ取りし知恵の実は、尽きることない密酒を滴らせ、私はそれを十度飲んだ。私は涙を流して待つた。そして光の届かぬこの場所で私の知恵は成長し、私もまた成長した。

私は知っている。それは自然に生まれ落ちる感情である。それは愛といい、その力は慰めを生み、安らぎを生み出す優しきもの。怒りを生み出し憎しみを生み出す恐ろしきもの。誰もが知り得、誰もが気づかないもの。それは第一のことである。

私は知っている。知恵を得ようとすれば知らなければならぬ。得なければならぬ。学ばなければならぬ。そして見なければならぬ。それは第一のこと。

私は知っている。それは第三のこと。それは神族と王族の系譜。神族の主人マストロ、王族の主人ニグラーボ＝エグニモの一人、彼らの繫がりは同じ一族の繫がり。一人の曾祖父はアンチクヴァ、そ

の息子はブランチョ、そしてその息子は異母兄弟のアルニカとアトリップ。二人はブランチョと白きブラと黒きクーミのそれぞれの息子である。アルニカは高き風車小屋のエミーと交わりマストロが生まれた。アトリップは風の標の館に住むミラと交わりニグラーボ・エグニモが生まれた。

私は知っている。グロトニーはベルダの大樹より生まれしもの。その土より生まれしもの。北の地、ジェンティーラの地へ向かいしグロトニーは全部で十二、族をまとめる三つのもの、それは知恵を持つアスペクティ、力を持つファウーロ、技術を持つフェルト。その下にカリン、フィー、フィギュロ、データロ、ニー、ブリーム、レウーテナント、マンキマーノ、スター・ロ・フロント。北の地で生まれたのはグラニー、グラム、そしてポスト。彼らはジェンティーラの加護を受けている。次の年にはさらに増えるだろう。そしてその次の年も増えるだろう。それは第四のこと。

私は知っている。大地の上で増えるもの、それは人である。アビオとオモトは四人の子を産んだ。一人は貴族となつた。一人は商人となつた。二人は農民となつた。人はいざれ大地に君臨するだろう。大きく多くの感情を持つだろう。彼らは生み出す知恵と学ぶ頭、壞す感情を持つ。それは第五のこと。それは何もかもを覆い尽くす！私は知っている。もし川の水が干上がり魚たちが消え、水を求めるのであれば、その川を潤す術を知っている。私は法術を知っているのだ。それは第六のこと。

私は知っている。稲が伸び悩み、草が萌えず、花々が頃垂れるそのとき、それら全てに活力を与える術を知っている。それは第七のこと。

私は第八のことを知っている。もしも私の知恵を得ようと私を傷つけようとするものがあるならば、また我が主ら、我が友人らを傷つけようとするものがあるのならば、私はそれらに私の翼より生み出した盾を与えそれらを守るであろう。剣を与えそれらを助けるであろう。傷つけようとする悪なるものに破滅を与える、それらは死を

持つて償いをしなければならないだろう。

私は第九番目を知っている。草花が息をするその音を。木々が囁くその言葉を。風が通るその足音を。波が唄うその歌声を。雲が眠るその寝息を。光が瞬くその瞬きを。闇が忍び寄るその音を。雷が怒るその怒号を。猫が羽虫が魚が鳥がその心臓を鳴らすのを。山が海が草原が森が氷が沼が空が、それらの語りを知っている。多くの者が傾けなくなつた弱氣者たちの声だ。それを私だけが聴くことができるのだ。

私は十番目のそれを知っているのだ。世は変転し生まれ変わる。それは言わば理であり、世こそ一つの魂と見るのであれば、世は死して生まれ変わる。変転は変わらない。終わりはやってくる。その日はいつか、それは私の唯一知らない真実。書を破り捨てるが如し、書に書く加えるに等しい。

知つていると言つことはその覚悟を持つと言つこと。それは苦しきことと思え！鮮やかであると思え！私が言えることはこれまでだ」これがアスペクティの前でモンドが語つた全てでした。アスペクトイがモンドを捕まえようと飛びかかったときモンドの両の丸い目は輝き、アスペクティの視界は失われたのです。アスペクティの前からモンドは霧の中へ溶け込むように姿を消し、次にアスペクティの目が見えるようになつたときにはその目の前には月明かりの森へ繋がる道があるばかりだったのです。「頭立ての馬車もオーリー ブに飾られた荷台も食料もありません。彼は辺りをきょろきょろと見渡しながら、それはまるで夢のようだと感じたのでした。愚かなグロトニーは思いました。自分はとても多くのことを知つている。それについては誰にだって自慢できることだ。でもわしは自分よりもより多くのことを知つている者がいることを知らなかつたんだ、と。

アスペクティはその茶褐色の肌をさすりながら、遙かに高い青空を見上げました。それからアスペクティは北の地へと戻つていきました。

アビオの子供たちと籠の中の鳥 その一

偉大な神と強大な王たちによる聖戦の後、大地母神セレナがオスの大地に降りたつて美しき世界が目を見開いたとき、彼女と夫のマストロはルピナスの花からつがいの人間を生み出しました。

彼らの名前はアビオとオモトといいます。彼らは世界が誕生して以来、東の園テーゴデオリエントに住み仲むつまじく暮らしていました。夫は頭がよく、狩りや釣りの腕も確かでした。妻は大変優しく器量もよい美しい妻で、二人共に神々には大変氣に入られました。ですからアビオが狩りに出かけるならば東の守り神フィラントロピオはアビオの上空に鳩を飛ばし見守っていましたし、彼が釣りに出かけ高波に襲われそうになつたときには 水の主人 バス¹¹オランドは本を読むのを止め、高波を凍らせてしました。

彼らには四人の子供たちがいましたが本当によく似ていて、親である一人にしても度々間違えてしまうほどでした。名前を長男から順々にルーデヤ、フラヴァ、ブルプロ、ブルアといいます。彼らはそれぞれ首から赤色、黄色、紫色、青色をした水晶の首飾りを下げています。これによつてアビオとオモトは彼らを見分けっていました。一度こんなことがありました。四番目のブルアの青い首飾りに太陽の光を透すと昼間であつても地面に紺色の、まるで夜の灯りのような影を落とします。それを大変に綺麗に思い欲しくなつた一番目のフラヴァはブルアに自分のものと交換するように言つたのです。彼は自分の黄色の首飾りに太陽を透かしても、同じ黄色い影が落ちるばかりでつまらなく思つたのでした。ブルアはいつもオモトの手

伝いをしている優しい子供でしたから、フラヴァアの頬みにも快く了解しました。ですがこうも付け加えたのでした。

「父さんの前では首飾りをちゃんと元に戻しましょう。父さんは騙されることが嫌いな人です。父さんは私たちを首飾りで見分けています。それを交換しているとばれたら兄さんとて私とてただでは済みませんよ」

と。しかしふラヴァアは逆にそれが大変面白そうだと思つたのでした。ですからブルアの頬みも聞かず、夕食の席ではブルアになりますて彼の椅子へと堂々と座つたのでした。ブルアは中々席に着こうとしませんでしたが、フラヴァアが睨みつけるものですから渋々と兄の席へ座つたのでした。

しかし夕食の途中フラヴァアの席に座つたブルアが突然に泣き出してしまったのですからアビオもオモトも驚いてしまいました。長男のルーチャは何事かと慌てて納屋に狩りで使う弓を取りに行つてしましました。ブルプアはじつとして動きません。

「ごめんなさい、父さん。私はフラヴァアではありません。本当は四番目のブルアなのです。首飾りを兄さんと交換しているからです」ブルアは声を高くして言いました。「騙してごめんなさい」

アビオはブルアの席に着いたフラヴァアに目をやりましたが、恐ろしくなつたフラヴァアは肉食獣に睨まれた小動物のような目で首を振りました。しかしながらブルアがあまりにも泣くものですから、それがフラヴァアの嘘だと言つことはすぐに分かりました。

怒ったアビオはフラヴァアの尻を火搔き棒で十三度打ち付けました。フラヴァアの眼からは火花が飛び叫び声を上げて泣き出しました。正直に事を話したブルアの尻にも三度だけ火搔き棒を打ち付けたのでした。それからは兄弟が水晶の首飾りを交換するようなことは一度もなかつたのです。

アビオとオモトが神々の館へ宴会に招かれたとき、アビオは神々にこの事を話しました。大勢の神が円を作っていて、マストロは壇上の玉座に腰掛けています。肘掛けにもたれながら、アビオがこしらえてきた、山葡萄から造った酒と野苺から造った酒、それに百合から造った酒の中にそれぞれ蜂蜜をたっぷりと注いでかき混ぜた密酒を飲んでいました。アビオは密酒を十五の壺に入れ、牛に引かせて献上したのです。そのマストロの隣ではバス＝オランドがグラスの酒を飲み、タルは鉄の義手を鳴らしながら果物を食べています。雷雲の若き狼は顔を真っ赤に染めて、酒を壺のまま抱えながら飲んでいるのでした。他の神々たちもグラスを手にしながらアビオの話を聞いていました。その円の中心に立つてアビオは話をしました。少々緊張しましたが、剛胆なアビオはものともせずに話して聞かせました。

女性神たちはオモトと共に舞を踊っていましたが、この話が始まると中には話を聞くに円に加わるものもいました。機織りの神である双子もそうでした。

「アビオよ、その話しさは真実か？お前には四人の子供がいると」マストロが言います。

「ええ、本當ですよ。あなた様には決して嘘はつきません」アビオは頭を下げて答えました。「次に来るときにはぜひ子供たちも招いてください。きっと連れてきます」

「そのお前の知恵は實に見事な話しじゃないか」

アビオはうなずきました。それから神に感謝を述べました。

「わしにも四人の子供たちがいる。三人は男、一人は女の子だ」マストロは言いました。

「だが誰も見分けが付かんぞ」バス＝オランドが挿みました。『そつくりだからな』

「その通りだ、誰もな！」円の中から誰かが叫びます。
ざわついて口々に話しているどの神よりも大きな声で偉大なる日の王は言いました。「そうなのだ、アビオよ。四人ともに実によく似ている。わしは四人が全く同じなのではないかと思つことさえあるのだ」

アビオは少し考えましたが、次いでこう言いました。「ご主人様、お言葉ではあります、が四人が同じなどと言つことは決してありません。似ているのは外見だけなのでござります。中身は全く違う、個性の固まりなのです。この密酒と同じなのです。壺は全くの同じもの、しかしながら中身は全くの違うもの。このままにしておれば匂いや色といったところまで、この壺も姿をえていくでしょう」

「お前は人間のくせに我々に意見するのか！」また円の中から声がしました。今度のは怒号に近いものです。女神たちは舞を止めて静まりかえりました。アビオは恐ろしくなつて震え上がりましたが、間違つてはいないとマストロの意見を待ちました。何しろ人間が神に対して意見したのです。勇敢なアビオであつてもさすがに平然とはいきませんでした。

しばらくの沈黙のあとで最初に口を切つたのはマストロでした。日の王は素早い判断を下しました。他の神々がアビオに手を出す前にアビオの顔を上げさせ、話し始めたのです。

「確かにお前の言つていることは間違いではない。わしにしても皆にしても同じ事だ。同じものなど一つとしてあらんではないか。お前たち」マストロはそう言つて双子の神を指します。「お前たちとて一人は酒が飲めず、一人は舞が踊れない、そうであつたな？」

「はい、そうですわ」双子の女神は声を揃えて言いました。

アビオはほつとしてもう一度マストロに頭を下げました。マストロもアビオの意見が正しいと思ったのです。万物の父の意見です。反対したり、アビオを疎ましく思つものはなくなりました。円の外ではまた舞が始まります。女神たちの美しい笑い声が広間に響き渡ります。

「それではいい案はないものか？わしの四人の子供たちを見分けるよい方法が」そう言つとマストロは長く赤い鬚を先の方までゆっくりとさするのでした。

「名前を早々に付けてはどうか？名を呼べば必ず振り返る」「それでは呼ぶまで分からぬぞ」

「どうしようもないなら分ける必要もないだろ」「リュー・ポは酔つてふらつきながらも意見をします。

「それでは議論をしている意味がないじゃあないか」スタルは遮りました。リュー・ポは眉を曲げ椅子の方へと戻っていきました。

そんな皆が声を上げる中、立ち上がったアビオが大声で呼びかけました。「こうしてはいかがでしょう。四人の神の子たちに籠につた一羽の小鳥を渡すのです。それに対して四人の神の子たちはどういった反応を持つて小鳥に接するのか、それで皆の性格がはつきりと分かるでしょう」

「なるほど、中々面白いではないか」マストロは満足そうに言いました。「それできつとわしの子たちはその表情を見せてくれるに違いない」

日の王は宴が終わった次の日、早速他の神に命じて四つの鉄の籠と四羽の小鳥を用意させました。それから小鳥たちを籠の中へ入れると、四人の子供たちのそれぞれの部屋へ持つて行つたのでした。

一人目の子供を見つけたとき、彼は自らの部屋で読書をしていました。彼は青い色の髪を持つた子供です。マストロラが部屋へ踏み入つて彼に話しかけましたが、全く返事はありません。どうしたとかと彼に近づいてみると彼は四冊の本を一度に読んでいました。ある本は魔法について書かれた本で、ある本は世界の歴史について書かれた本、それに剣術について書かれた本、世界の作りについて書かれた本の四冊でした。彼は机の上に四冊の本を並べ、瞬きもせずにじっと本を読んでいます。よく見ると彼の瞳はもの凄い早さで右へ左へと走り回り、小さな声で何だか呟いています。それは目の中を小さなグローテーが走り回っているように見え、口から出る言葉は呪文のようでもありました。マストロは彼の肩を叩き、彼は驚いたように飛び上るとやつとのことで偉大なる日の神である父に気がついたのです。

「これはお父様、偉大なる神、それに他の神々よ、失礼しました。
ぼくは読書に集中しておりました」神の子は深々と頭を下げました。
「構わんよ。それよりお前に贈り物があるのだ。贈り物はこの籠と
鳥だ。これを受け取つてもらえるかね？」マストロはそういうつて籠と籠の中の鳥を差し出しました。

青い髪の子は籠をしてぶら下げる、本を見つめるよつじに

つと見ました。それから口を開きました。「「これをおぼくに飼えといふことでしょうか？」

「これはわしがお前に贈ったものだ。つまりもつお前の物だ。煮るなり焼くなり、どうしたってそれはお前に任せるとしよう」マスト口は答えました。

「これからお前はこのぼくとしばらく一緒になるのだね」青髪の子は鳥籠を窓に近い机の端に置くと、その前に真っ白な本を一冊とペンを置いて鳥に対し質問をし始めました。籠の中の居心地はどうか？鳥たちがどの動物よりも朝早く目が覚めて歌い出すのはどうしてか？この場所から出て行きたいか？横になつて眠ることはあるのか？夜を恐れることはあるのか？果物と小虫や羽虫は一体どちらが美味しいのか？鳥の唄を歌つてくれはしないか？様々な質問を朝から晩までずつとし始めたのです。他の神々が食事をする間も彼だけは食べず、寝ている間も彼だけは眠ることはありませんでした。ミリアドが夜空を黄金色に照らし、それから姿を隠しても彼は質問を続けていました。小鳥もさすがに参り、目を回し、綺麗な茶褐色の体毛が抜け落ちてしまう始末でしたが、質問が終わる頃には真っ白だった。彼の本はびつしりと文字が書かれて真っ黒になつてしましました。

「満足すると、どうして疲れるのだろうな？」青髪の神の子は笑つて言いました。

彼はその後、質問をし終わつた後、横になると三日三晩の眠りについてしまいました。小鳥も同じように三日三晩眠つてしましました。

「どうやら彼は好奇心が強いようだ」スタルはそう言いました。「自分の知らないことを知りたがっている。どうしたら一番よいかを考えているんだろうな」

「そのようだ」マストロは大きくうなづいて、一人目の子供をエンツィクロペディオと名づけました。

二人目の子供は館の外にいました。彼はその手に身の丈ほどもある剣を振って稽古をしていました。彼の髪は緋色に伸び、四人の子供の中では最もマストロに近い色でした。彼はテーロデディオの庭に立つ魔法の掛かった榆の木をその剣で打ち付けていました。この魔法の榆の木は、自らに害をなす攻撃ならどんなものでも決して傷つけることは出来ないというものでしたが、緋色の髪の子が打ち付けるとその衝撃は凄まじく、傷はつかないけれどもグラグラと揺れていましたから、上で休もうとした動物たちは一目散に逃げ出しました。彼はマストロら神々が話しかけると手を休め、頭を下げました。

「これはお父様、偉大な神々たちよ、このぼくに何かご用でしあか?」彼は言いました。

「頭を上げなさい」マストロは言います。「今日はお前に贈り物があつてここまで来たのだよ。この鳥のことだ。これを受け取つてもらえるかね?」

「構いませんよ。ですがお願ひがあります。出来ればこのぼく一度、剣を交えてみてはくれませんか?ぼくは一日たりとも休まずにこの腕を磨いてきました。ですから自分がどれほどのものか試してみたくなりました」神の子はその大剣を地面に突き刺して言いました。

「それは無理がある。わしはお前の親でお前に對して剣を上げるなどといふことは出来はせん」マストロがそう言つと神の子は悔しそ

うな表情を浮かべました。マストロは続けます。「だが代わりにお前には最もいい相手を紹介してやる。それは 雲を駆るものだ。やつならきっと相手になるだろ？」

「あの 雷雲の若き狼 が相手だとこうのですか？このぼくがあの方と剣を交えようとは、心より感謝いたします、お父様。鳥も受け取りましょう。それで・・・」緋色の髪の子は喜び、お辞儀をした後、籠の鳥を受け取ると言いました。「これをぼくに飼えとこう」とでしょうか？」

「これはわしがお前に贈ったものだ。つまりもうお前の物だ。煮るなり焼くなり、どうしたってそれはお前に任せるとしよう」マストロは答えました。

「お前には聞きたいことがある」緋色の子は籠を壇の上に置くと、その前に座り小鳥に向かつて話しかけました。「お前はこの籠の中にいれば楽に暮らしていくとでも思っているのか？この狭い中で、自分の力でどうにかしようと、そう考えたことはないのか？自分の力でここから出てみろ！強くなければいけない！」

小鳥は彼の言葉に鼓舞され、籠の扉をその小さなくちばしで持ち上げようとしました。しかし小鳥にとつてそれは木の幹を持ち上げるような行為に等しくびくともしません。小鳥は翼も使おうとしましたが、やはり扉はびくともしませんでした。小鳥は次に扉へ頭から体当たりをしました。何度も打ち付けるものですから額が裂け、血が噴き出しました。片目も潰れて見えなくなってしまいました。緋色の神の子は三日三晩、食事もせずに寝もせずに籠の前にじっとしていました。

小鳥が籠の扉を破ったとき、小鳥はそのまま息絶えてしましました。小鳥の血や抜けた羽毛が宝石のようにきらきらと煌めいていました。それを見届けた神の子は小鳥を籠から出すと壇の下に小鳥を埋めて、その上に墓標を立ててやりました。

井なる者 と 銀色の名工 は一人して話し合いました。

「どうやら彼は強く逞しい心を持っているようだ。それに勇気もあ

る」スターは銀色の義手を鳴らしながら言いました。

「そのようだ」マストロは大きくうなづいて、二人目の子供をアギ
"スカルラー"と名付けました。

三人目の子供は自らの部屋で透明の冷たいハープをかき鳴らしていました。彼女は四人の子供たちの中で唯一の女性の子供です。彼女の髪は薄い緑色に伸び、それは萌える草原のようでした。主人と名工は部屋の戸口に立ちすくみそのハープの音を聞いていましたが、その音色は眠気を誘いましたし、妖精たちに魂を抜かれているようでもあり、酒に酔つて気持ちよくなっているようでもありました。酒宴の席でこの音色を聴いたリュー・ポは「争う気持ちさえも朝もやのように消し去られる」と言いましたし、ヴェントなどは、使いの翔る男 メーヴォに「きっとテーコティオーの素晴らしいハープ弾きになるでしょう」と伝えたほどです。音楽が終わるに近づく頃にはスタルはすっかりその音楽に酔いしれて戸口に座り込んでいました。マストロは手を叩いて賞賛しながら、眠たいのを我慢して、彼女の所まで進んでやつとのことで話しかけたのです。「これはお父様、いつからいらしたんですか? 気づきませんでしたわ」緑の髪の彼女はハープの弦を手で押さえて頭を下げました。

「今来たばかりだ。それにいい音色だった」マストロは言いました。

「お前には贈り物を届けに来たのだ。受け取ってくれるな?」

マストロは籠の鳥を持ち上げて神の子の前へぐいっと差し出しました。神の子はそれを受け取ると優しく両手で支え、母親であるセレナそつくりの笑顔で見つめました。

「まあ嬉しい。こんなに可愛らしい小鳥をお父様からいただけるなんて。私が飼つてもよいのですか?」緑の髪の子は声を高くして言

いました。

「これはわしがお前に贈ったものだ。つまりもうお前の物だ。煮るなり焼くなり、どうしたってそれはお前に任せるとしよう」マストロは答えました。

「これからは私と一緒に歌いましょう」縁の髪の子は籠を窓に一番近い机の上に置くとハープをかき鳴らしました。すると小鳥はハープの音色に合わせて楽しそうに歌い出し、窓からはその音楽を聴きに来たかのようにサラサラとした風が吹き込んできましたのでした。神の子はそれから毎日のようにハープを聴かせてやりましたし、小鳥に食事も与えました。それに籠の中の掃除もしてやり、小鳥が病気に掛かったときは涙を流し、直るまでじつと看病を続けました。まるで自らの子供のようにそれは大切に育てたのでした。

「どうやら彼女が持っているものは慈愛の心と、それに母性だな」スタイルは腕を組んで言いました。「優しい心の持ち主だ」

「そのようだ」マストロは大きくうなずいて、三人目の子供をシイー＝アグラブラと名づけました。

四人目の子供を捜すのは一苦労でした。あらゆる部屋の中を覗き、樽の中を覗き込みました。森の中を呼んで回り、湖の中を探しました。三日三晩の間テ一口デディオのあらゆる所を大勢の神たちが探し回ったのです。彼らが必死になつて探したのも、彼が四人の中の最期の人だと知っていたからです。名前を授けるのも後は一人だけだったからでした。マストロは羊を一匹生け贋に捧げると、その血の中にベルダの樹の枝を一本浸しました。それにおまじないを掛けると、血に染まったベルダの枝が燃え上がつたのです。その炎は高く燃え、燃え尽きた灰は文字となつて浮かび上りました。占いには『高く眠る』と出たのです。すぐさま神々が庭の木々を一本一本探してみると、四番目の子供は木の上で昼寝をしていたのでした。一番太い木の枝に寝そべり、細い枝には数匹の小鳥とリスがいます。マストロが呼びかけると、四番目の子供は驚いて飛び起き、危なく頭から落ちるところでした。

「これは、お父様、それに名工スター。このようなところから申し訳ありませんが、このぼくに何かご用がおありますか?」神の子は言いました。四番目の子供は輝く金色の髪を持つています。

「まあ構いはしないよ。今日はお前に贈り物を持ってきたのだ。もちろん受け取ってくれるね?」マストロは言いました。

「贈り物ですか? それは何ですか?」そう言つた金髪の子はひらりと木から飛び降りて言いました。

「それはこの小鳥のことだよ」マストロは差し出して言いました。

受け取つた金髪の子は籠を口にかざしたり、口の前に持つてきて

じつと見たりした後、こう言いました。「これをぼくにくれるのですね？」

「その通りだとも。これはわしがお前に贈ったものだ。つまりもつお前の物だ。煮るなり焼くなり、どうしたってそれはお前に任せる」としそう」マストロは答えました。

「それではこうしよう。好きにするといいよ」

金髪の神の子は貰つたばかりの鳥籠の扉を開けると、それを出つ張つた木の幹に引っかけました。そして言いました。

「お前は自由なのだから、どこへでも飛んでお行き。でももしこの場所が好きだと言うのなら戻つてこればいい」

それから彼はまた木の上へ登り、一番太い枝の上に座つてみると、きは絵を描いたり、ある時は詩を詠んだり、またあるときは本を読んだりしました。逃がした小鳥は彼の所へ舞い戻り、他の小鳥たちと共に唄を歌つたり、木の実を持つてきたりしていましたが、彼は快くそれに応じ、疲れ果てると金髪の子は眠るのでした。蜂がやつてきてぶうんぶうんと彼の前を旋回しても動じることなく、欠伸をして蜂を追い払うのです。

「何と面白いやつなんだ」スタルは腹を抱えて笑いました。「主なる者からの贈り物をいきなり逃がしてしまつとは、本当に自由なのだな、彼は。自然を心から好いている。だからこそ恐れることを知らない、見た目以上に肝の据わつたやつよ」

「どうやらそうらしいな」マストロも呆れるばかりでしたが、また笑いました。そしてマストロは彼にゼフィー口といつ名前を与えました。

「」のようにして 主なる者 日の王 と 大地の母 から生まれ落ちた暁の四王はそれぞれの名前を授かりました。しかしながらこれは人間であるアビオの知恵によつて行われたことです。神々の

中にはやはり人間のアビオを好いていない者もおりましたが、なに
はともあれ彼の知恵のおかげで暁の四王は名前を手に入れることができ
出来たのですし、マストロはアビオを大変気に入っていました。ア
ビオもまた決して図に乗ることはなく、ただただ自分の主人に感謝
の頭を下げるのでした。でもアビオがもしも偉い態度で報酬を求め
るような傲慢な人物であつたとしたら、日の王は彼の腕を切り
落としていたかも知れませんね。

アーネスト・ホーリーの「魔女の城」

「ヴェルダ神話物語」はまだまだ続きますが、とりあえず一旦休止します。本編の「琥珀物語」は毎日更新しているので、那儿へ下さい。本編へは目次からどうぞ。

リューポとアギの決闘 その一

雲を駆るもの は退屈していました。時間は変わらずのんびり流れ、風は静かに吹き、平和しかなかったからです。彼は神々の中では一番か二番目に強く、剣を振らせれば大木をまるでパンを切るみたいに倒しましたし、岩を持ち上げ握りつぶすことだって出来ました。彼はひたすらに強さを求めました。そこで彼は知恵の梟モンドが住まう月明かりの森に出かけると、強大な王たちの住まう淵界から地上に出てきた異形の者たちと戦いに明け暮れました。

彼は雲に乗り、彼の従属の戦士であるアクラ 鋭い とアクソーアーの二人を連れて月明かりの大木の下で休むことなく戦っていました。

ある日のことです。リューポの元へ 日の王 マストロよりの使いが訪れました。リューポたちは倒れた大木の幹にドシンと腰を落とすと、使いの話に耳を貸しました。

「その用というのは何だね？」リューポが言います。

「はい、用事というのは我が主マストロ様よりあなた様へのことであります」使いは頭を下げて言いました。使いの背中はせむしのように丸まっていて、その声は嗄れていましたが、大きく聞きやすいものでした。

「して用は？」とリューポ。

「はい、それはあなた様への決闘の申し込みでござります」せむしの背の使いは言います。

「なに？わしに対する決闘の申し込みだと？」リューポは立ち上がり拳を握ると体を震わせました。彼の銀色の髪はざわざわとうね

り、目は赤くなりました。「そいつは一体どんな奴だ！」

せむしの使いはリューポの姿に恐ろしくなりましたが、リューポは怒っているわけではありませんでした。自分が最も強いと思いこんでいたものですから、そんな自分に決闘を申し込んでくる勇気のあるものが、神の国にまだいることが嬉しかったのでした。または身の程知らズガ。

「相手はマストロ様の一番田の『子息アギ』スカルラート様でござります」せむしの男は言いました。

「そうか、奴の小倅のアギが相手か。奴には何度か指南したこともある」リューポは銀色の髪をさすりました。「しかし奴がそんなに力を持つていたとは思えんな」

そうはいうもののリューポは決闘が待ちきれない様子でした。リューポはアクラとアクソーを連れて、早速、神々の土地テ一口デティオの神の館へ向かいました。あまり急いでいたものですから、せむしの使いのことなどすっかり忘れていました。せむしの使いが森を出たとき、リューポたちはすでに丘を三つ越え、最も広いウヌの河の向こう側でした。彼らは脇目もふらずにテ一口デティオに向かい、気がつくと太陽はすっかり沈んでしまい、月の神ミリアドと多くの星々が空へ昇っていました。三人ははつとして地に降りると剣を大地に刺し、立つたまま眠りました。そして主人の太陽が空へと昇る前に目を覚まし、また神々の館へ向かうのでした。

リューポとアギの決闘 その一

神々の城門へ辿り着くとリューポは両手を城門にあてがい、力一杯に押し開けました。しかしテーゴデティオの庭には何も動くものはありません。それもそのはずです。リューポが興奮してあまりにも早く帰ってきたがために、まだどの神たちも眠つたままだったのです。笛吹の女神アビーロも、セレナもタルも小鳥や草花だつて眠っています。

雲を駆る者 はびしひしと神々の庭へ歩を進めるとき声でこう叫びました。

「わしだ！マストロの息子アギ＝スカルラートとの決闘のため、たつ今テーゴデティオに帰つたぞ！今すぐ姿を見せろ！」

その声はあまりにも大きく館中に響き渡りました。鳥たちは慌てて飛び起きたとその場から飛び立ちました。神々も何事かと飛び起き、中には戦いが始まつたのだと勘違いをして槍や斧で武装をする者だつていましたが、それがリューポの声だと分かると、不満そうに声を漏らして部屋へ帰つていきました。

まさにこれこそリューポの悪い癖でした。勇猛で頼りがいのある彼も、戦いのこととなると全く周りが見えなくなってしまうのです。彼は荒々しく息を吐き、髪を逆立てて、喉の奥から聞こえてくるのは、雄叫びとも、笑い声とも取れる何とも恐ろしいものでした。彼は自慢の大剣を担ぎ上げながら館の前に一人の従者と共に立ち去っていました。

館の扉が勢いよく開き、アギ＝スカルラートが姿を現しました。彼は腰から下に布を巻いているだけの姿で現れ、手には 銀の名工

スタルによつて鍛えられた名剣を握り締めていました。それは銀の名工 スタルが十年かけて鍛えた三本の剣のうちの一振りで、それらは切れ味の鋭い順に、勝利の剣トーリンク、獣の剣コルネリカ、嘆きの剣サング（流れ出る血の剣）といい、アギが持つものは獸の剣コルネリカです。

トーリンクは五千の敵を、コルネリカは「一千五百の敵を、サングは千の敵を、それぞれ討つたとしても、刃こぼれ一つ起」さない名剣でした。

さて、アギの体は逞しく、顔は端整で、右の臉には白い傷があります。彼の髪は太陽神のそれを色濃く継いでいて、灼熱のじとく真っ赤に揺らめいています。アギは言いました。

「よくぞ戻られました、リューポよ。俺はこのときを心待ちにしていたのだ。俺はこれまでこのテー口^テティオの庭の中でひたすら自分の腕を磨いてきた。しかしこの土地から外のことは恥ずかしながら疎いばかりで、自分がどれほどまでに強く、そしてどれほどまでに弱いのか、自分の役割とは何なのか、それを知る術を俺は兄ペディオに尋ねた。ペディオは頭のいいやつだ。するとペディオは答えたのだ。それはこの土地の外で戦つておられるあなたに教えを乞うのが一番であると。さあリューポよあなたの剣の一撃を持って俺に教えてはくれまいか？」

リューポは髭を撫でながらアギの握っている獸の剣コルネリカを見ました。そしてそれが素晴らしい光輝いており、自分の持つている大剣よりも遙かに巨大であるように思われました。リューポは少々驚きながらも、それを微塵も感じさせないほどにそり返りました。

「田の王マストロの子アギよ。わしに決闘を申し込むとは本気かね？ついこの間お前に指南してやつたときには取るに足らん小僧であった。今こうしてお前の姿を見るに、おそらくは強いのだろうよ。しかしそれだけだ。お前には何ができる？お前の強みとは何だ？」
アギ^アスカルラートは戸惑つて頭を抱えました。アギの口から何

の答えも出ないのを見て取ると、リューポの従属の戦士アクラとアクソーはアギをあざ笑いました。リューポはいかにも渋い顔をしてアギを見つめています。

「考えもなしに力を振るうばかりでは、日の王の息子と言えど十分ではないようだ」アクラが言いました。

するとそれを聞いたアギははたと顔を持ち上げて、にやりとしながら彼らを睨み付けました。

彼の答えはこうでした。

「俺に出来ること、それはまさに力を振るうことだ。そしてどんな相手にだつて挑んでいける。リューポよ、俺の強みとは力と勇氣だ。あなたに教えられたぞ」

アクラとアクソーは激昂しました。彼らは 雲を駆る者 の従者であり、また勇敢な戦士でもあります。彼らはこんなに侮辱されたのは初めてだと感じたのです。リューポは静かにそれを聞いていましたが、とどろくような声で言いました。

「そいつは素晴らしい答えを聞いた。しかしこのわしと決闘をしたいというのであればそれは早々簡単なことではないぞ。わしには勇敢な従者が二人もいる。鋭い と 軸 だ。わしを打ち負かしたくとも二人は黙つていないので」

「そいつは面白い。ならば一人には恥をかいていただくとしよう」とアギは言いました。「先ほど一人は俺のことをあざ笑つた。このあと二人が俺のことを怖じるようになるか、ひれ伏すのかは知つたことではないが、俺へのあざ笑いは我が父への侮辱だ！許すまい！」アギがあまりにも鋭く睨み付けるのでアクラとアクソーは驚いてたじろぎました。そして知らずの内に後退していました。彼らの足元には草が剥げ土塊が顔を出しています。

リューポとアギの決闘 その三

それから三人の戦士と一人の挑戦者は連れ立つて館の裏にある、見上げるほどの巨大きな岩の前に歩いて行きました。そこは短い草が生え揃つたとてつもなく広い広場となつていて、その向こうは大地が消え、流れる川も土も全てが奈落へとなだれ落ちていました。

コルネリカを地面に突き刺してアギは言いました。

「剣による打ち合いでも良いが、それよりも素手での倒し合いこそ本当の強さを知るに相応しいと俺は考える」

アギはリューポを不安そうな目つきで見やりました。もしかしたらリューポは自分との決闘をするつもりなどないのではないかと思ったのです。アギはリューポをその気にさせるためにあれこれと考えました。しかしながら思い浮かんでくる素晴らしい考えなど何もありませんでした。

戦闘神リューポは笑いました。「素手での決闘とは実にいいぞ。それこそまさにわしが望んだことかも知れん。それに心配することはない。わしはお前の父、我らが主人にして友人、マストロの黎明の光にかけて約束すると誓おう。お前が一人を見事叩き伏せたならば、わしは全力でお前を倒しにかかるとする。さあ、その名高きこぶしの力をわしに見せてみよ」

リューポが言い終わらない内に、彼の脇に立っていたアクラが前へと進み出ました。アギは彼を見ました。アクラは少しばかり細く、体も小さいように見えました。しかし体は引き締まつていて、特に足の筋肉は素晴らしく整っているのです。アギは目を閉じて大きく息を吸い込むと、ゆっくりと吐き出しました。そして身構えて大きな腕をアクラめがけて突き出しました。アギはその最初の一手でア

クラを掴み上げることが出来ると思い込んでいたのです。しかし手を伸ばした先にアクラの姿はすでになく、アクラはいつの間にかアギの背後に回りこんでいました。挑戦者は驚いて振り返りました。そして再び掴もうと手を伸ばします。しかしながらやはり捉えることは出来ません。アクラは駆けられるだけの速さでアギの周りを疾走しました。

それから幾度となくアギの腕を避け続けていたアクラですが、次第に息が上がつてしましました。しかしながら、どれ、とアギを見やると、アギは全くの疲れ知らずで、それどころかますます勇ましく向かってきます。そしてついにアギの腕がアクラを捉えると、アギはアクラを抱え上げ、勢いよく放り投げてしまったのです。高く舞い上がったアクラは地面に音を立ててぶつかり、そのまま気を失つて倒れてしまいました。

次に進み出たのはアクソーでした。彼はアクラ以上にやる気十分で、両手を叩き、鼻から息を吐き出しました。両者は大股に歩み寄り、ほとんど同時に殴りかかりました。しかしどういうわけかアギのこぶしは外れたのに対し、アクソーのこぶしはアギの鼻っ面にぶつかり、アギの目の前には火花が散りました。アギがもう一度、今度は先ほどよりもずっと強く、そして何度も殴りかかりましたが同じようにはずれ、軸のこぶしは全てがアギに当たりました。これには堪らず、さすがのアギも不意によろめいて、地面に倒れてしまいそうになりました。アギは何とか踏み止まって、痛む頭を振りながら何が起こったのかを考えました。そしてある考えに辿りついたのです。

アギは言いました。「さすがに狼の従者だ。本当にもう少しでやられてしまうところだった。だがね、あんたはもう俺をどうするけどつてできないだろうよ。さっきのアクラ、鋭いは足が怠慢だったようだ。そしてあんたは何とも器用じゃないか」

アクソーはアギがにやりと笑うのを見てぞっとしました。そして目の前の若い神がとても勇敢で、とても大きく見えた。

ゆっくりとした足取りでアギはアクソーに向かってゆきました。アクソーもまた同じ足取りで近づきます。二人の距離が狭まるとアギは雲が流れるようにゆっくりと腕を突き出しました。アクソーはビクと体を震わせました。アクソーは相手の動きに合わせることを得意としていましたが、こうもゆっくりでは合わせても意味がありませんでした。そしてついに 軸 の頬を思い切り殴りつけたのでした。アクソーはうめき声を上げました。そしてふらつき仰向けて倒れてしまいました。

リュー・ポとアギの決闘 その四

これらをずっと見ていたものがありました。それは岩の上にとまつた一匹のカラスでした。カラスは叫びました。「条件は果たされました。アギ様は約束どおり一人の従者を倒しました。約束は私の耳にもちゃんと届いていますよ。今度はリュー・ポ様が約束を守られる番だ」カラスはクアクア笑いました。「さあどちらが本当にお強いのでしょうか。アギ様は若く鋭い目がある。よもや逃げ出すことはないでしような?」

黙つて聞いていたリュー・ポはカラスを睨み付けて落ちていた石を拾い上げると、カラスに向かつて投げつけました。慌てたカラスは大急ぎで空へと逃れました。

リュー・ポが空に逃げたカラスを追つているのを見ると、しめたとばかりにアギは雄叫びをあげながらリュー・ポに突進していきました。戦闘神は空気が凄まじく揺すぶられ、森や林はざわめき立ち、さらには地鳴りが起こるのを感じました。

リュー・ポはアギが猛獸のように向かつてくるのを鋭く見返すと、両手のこぶしを激しく打ちつけ、髪の毛は逆立ちました。彼らは広場のちょうど真ん中でぶつかりました。その瞬間に掴み合い、お互いの指が一本ずつ音立てて折れました。しかし彼らは気にすることなく激しく相手を押し合います。

互いの力は全くの互角で、一人ともその場から動けませんでした。少しでも力を抜けば押しつぶされてしまいそうです。一人の戦いは長い間続きました。太陽が昇り、沈み、また昇つても決着はつきません。そしてそれは七日間も続いたのです。その間に風は嵐となつて、大地は地震となつてテ一口デディオを襲いました。

このままでは神々の国が壊されてしまうと困り果てた他の神々はどうにか一人の戦いを終わらそうとしましたが、力では二人は止まりませんでした。それはたとえマストロであっても無理でした。

そんな中、一人の若い神が手を上げて一人を止めてみせると名乗り出ました。彼は太陽神マストロと大地母神セレナの四番目の子供で、アギースカルラートの弟ゼフィーロでした。

しかし神々はマストロの息子と言えど、若いゼフィーロに一人を止めることなど出来るものか、と相手にしませんでした。彼が主張する度に手を振って退け、背中を向けました。でもゼフィーロは最初から気にはしていました。彼は笑いながら林檎を一つと蜜酒がいっぱいに入った酒樽を馬車に乗せて、リューポと兄の元へ出かけていきました。

二人の神が睨み合う場所へゼフィーロの馬車がやつてきました。しかし風や地鳴りがひどく、馬は怖がって進もうとはしません。仕方なくゼフィーロは手にした林檎だけを身に、戦いの場所へ近寄りました。

「戦闘の狼リユーポ、そして兄さん、もう戦いは終わりにしてはくれないかな？ 大地は裂けて、空には稻妻が燃えています。このままでは動物たちの土地や人間たちの土地に被害が及ぶでしょう」とゼフィーロが言いました。

「弟よ、そやつらがどうなつたところで俺の知ったことではない。今俺はリューポ殿との戦いで手一杯なのだ。邪魔をするのなら許してはおけんぞ！」アギは言い返しました。

そこでゼフィーロは手にした林檎をおいしそうに食べ始めました。そして言いました。

「お二人とも疲れておいででしょう。何せ七日間もこのままなのですから。喉が渇いて果物の蜜や酒を求めているのではないでしょか？ お腹が空いて油滴る肉を求めているのではないでしょか？ もしかするとこの地鳴りはお二人の腹の虫では？」ゼフィーロは再び林檎を齧りました。

戦闘神と若き挑戦者は喉を鳴らしました。ゼフィー一口の言つたことは的を得ていました。実際七日間二人は何も口にしてはいなかつたのです。しかも大柄な二人ですから我慢の限界でした。しかし二人は見栄を張りました。

リューポとアギの決闘 その五

「ゼフィ一口よ、俺は引いたりはしないぞ。俺たちの力は見ての通り全くの互角だ。決着はまだ先だろ？よ。しかしもしリューポ殿が負けを認めるのであればこの嵐も止むだろ？」アギは言いました。

ゼフィ一口はリューポを見やりました。「リューポ様、どうか戦いを終わらせてください。私は知っています。あなたの力はこんなものではないはず。月明かりの森で戦うあなたは何よりも勇敢で、我が父マストロと肩を並べるほどの実力をお持ちでしょう」

アギはゼフィ一口の言葉に激昂しました。それではまるでリューポが手を抜いて自分と戦っているような言い方でしたから。彼は弟に向かつて大声で叫びました。それにはさすがのゼフィ一口も目を閉じて耳をふさいでやり過ごす他ありません。

「マストロの子ゼフィ一口」リューポがどつしりとした声で言いました。「お前はこの神の土地を許可もなく出歩き、月明かりの森まで行つたと言うのだな？それは許しがたいことだ。しかし我らの元へ出向いたその勇気に免じて黙つていてやろう。次にマストロの子アギースカルラートよ。お前の弟ゼフィ一口が言つたことが全てだ。少々わしも疲れてきたようだ。そこで臆をすここのわしに向かつてきたその勇気に免じてわしの力を見せてやる」

雷のように青白く光っているリューポの瞳を見て、アギはリューポの言葉が嘘ではないことを悟りました。そしてそれ以上抵抗する力はないと知つていながらも腰を落として歯を食いしばりました。「ゼフィ一口！わしの髪飾りを抜き取れ！」リューポは大声を上げました。

早速ゼフィー口は恐る恐る手を伸ばし、ざわめく銀色の髪の中から髪飾りを見つけると、勢いよく引き抜きました。するとアギは目を見開いて口を開けました。動かそうとしてもどれだけ力を込めても、少しもリューポの手から逃れられないのです。

リューポは手を組んだままアギを後ろへ押しやりました。そしてアギの体を大岩へ押し付けるとアギは苦痛で悲鳴を上げました。大岩はぎしぎしと音を立てて振動し、てっぺんまでひびが入ると岩は粉々に砕け散り、方々へ飛んでいきました。こうして飛んでいった岩々は、海岸へと落ちてそれらは岩礁となり、北の地へ落ちてそれは山脈となりました。

ついにアギは大声で負けを認めて一人の決闘は終わりました。吹き荒れていた風は穏やかになり、大地は震えるのを止めて荒れた土は静かに休みました。それは他の神々たちも知るところとなり、同時に決着を告げる合図の役目も果たしています。

戦闘神と挑戦者、その弟はしばらく気の抜けたようにその場に佈んでいましたが、すぐに大きく息を吐いてその場に座り込みました。そして馬車の荷台から積荷を降ろして 锐い と 軸 も加わると、彼らは次に太陽が彼らの頭上を照らすまでその場で飲み明かしたのでした。

アギはリューポとの戦いで自分はまだまだ未熟だったにもかかわらず少しばかり自信過剰であったことをひどく恥じました。しかし彼は同時にリューポという目標も見つけたということです。彼はあれほど力の差を見せ付けられましたが、微塵も諦めようとは思いませんでした。

それで彼は剛毅な向上心と、強者に対する反抗心の象徴でもあるのですよ。

バス＝オランダは海に住む生物たちの主であり、水の神々の司であります。彼は優れた魔法使いでもあり、手にした杖を巧みに操り、波や風を自在に操りました。また人々に品物を交換することを最初に教えたのは彼であったので、商人たちの保護者でもあります。彼の真鍮の船が波と共に海を進みますと、たちまち海は穏やかになりました。

ある日彼が西の大海上を船で進んでいました、海中から突然年老いた一頭のイルカが姿を現しました。そのイルカの目は塞がれていて、どうやらイルカは水神オランダとは気づいてはいないようでした。バス＝オランダはイルカを見やりました。するとその哀れなイルカは何日も獲物を食べてはいないように痩せこけていて、体中は岩にぶつけて傷だらけ、おまけに食いちぎられて右のヒレがなくなっていました。

バス＝オランダはイルカに言いました。「哀れなイルカよ。お前はなぜ生きている？ そんなになつては自ら死にたいとは思わないのか？」

「どなたが存じませんが旅の人よ。私はそのようには微塵も思いません。私のこの命は天のみが知っているものでござります。ならばその日が来るまで懸命に生きようと思います」イルカは答えました。その答えを聞いたオランダはこのイルカを大層気に入りました。そこで杖をイルカに預けました。

「私はお前のこと気が入った。お前はなんと強い心を持っているのか。もしお前のことを持てかけるようがあればお前もそのものを軽蔑しても構わない。お前にこの杖を預けよう。この杖には私

の魔法の力が込められている。この杖の力を使って好きなものを見て、好きなものを食べて、好きなところへ泳ぎに行くがよい」そう言つてオランドは船の向きを変えると、波間に消えて行きました。イルカはそのとき初めてその相手が水神オランドに相違ないと知り、イルカは海中へ頭を垂れ、身を小さく寄せ、バス＝オランドへ許しを請いました。

イルカはオランドから『えられた杖を大事に背中に乗せてゆつたりと波に揺られていました。するとどうしたことか、見えなかつた目はぼんやりと見え始め、右のヒレは元通りに甦り、イルカを襲う海の魔物たちも決してよつては来ませんでしたので、彼はお腹がいっぱいになるほどに魚を捕らえてそれを食べました。イルカは今まで出来なかつたことを思う存分楽しもうと思いましたが、ふと自分がこんなにも幸福を感じてよいものか、と恐ろしくもなりましたので、希望以上のものは望むまいとしました。イルカはそれから毎朝の祈りを欠かしませんでした。

ある日のこと年老いたイルカが海を泳いでいると、波間に一艇、小さな小船が漂っているのを見つけました。そこには男が一人乗つていて、名前をデューフメルと言いました。デューフメルの体は痩せこけて細く、肌は太陽の光と潮風に炙られて痛々しくただれています。彼は小船の中で体を丸めたままピクリとも動きませんでした。

イルカは船に近づいて言いました。「もしもし、このような海の真ん中であなたはどうしたのですか？このようなどころにいればあなたは太陽に焼かれるか、怪物たちの餌食となつてしまつでしょう。どちらにしろ死んでしまいますよ」

デューフメルは力なく答えました。「あなたは誰だ？俺は南の漁師のデューフメルだ。俺は日を焼かれ見えないでいる。波も見えないし、自分の手も見えない。向こうには俺の家はないのだ。俺はまだ暗い内から星を頼りにしながら、釣竿と網だけを持つて海へ漁に出たのだが、乱暴者の風に煽られて流されてしまった。しかもこの波はどんどんと俺をさらつて行つてしまつし、俺はもう戻れないだろう。

妻や幼い子にももう会うことは出来ないのだ。今はこうして静かに自分の死を受け入れているところだよ」

イルカはデュフメルを哀れに思い、涙を流して悲しみました。目も見えず、体は傷つき、自分の運命を受け入れる彼の姿こそが自身と同じだと思ったのです。イルカはどうにかしてこの哀れな男を助けてやれないものか考えました。そして水の主人バス＝オランドから借り受けた魔法の杖を男に貸すことを考えたのです。ですが魔法の杖を手放せば自分は以前の年老いたイルカに戻ってしまいます。自由に海を泳ぐことも、餌を獲ることも、海の中から頭上に揺らめく空を見上げることもできなくなるでしょう。しかしイルカは迷いませんでした。背中から魔法の杖を降ろして男の前へ差し出しました。

「あなたはまだ助かりますよ」とイルカは言いました。「決して諦めてはいけませんよ。この杖をお使いなさい。これは魔法の杖です。これががあればあなたの皮膚は元の通りに治るでしょうし、波と風はあなたの親しい友人となってくれるでしょう。必ずあなたを南の町まで導いてくれるはずです。私は随分と楽しい時間を過ごしました。私にはこれで十分です。ですが命が助かつたら、この杖を必ず返すと約束してください。私はこの杖を水神オランド様より預かり受けました。オランド様は私の命を救つてください、あまつさえ束の間の自由と幸福を与えてくださいました。その御恩のためにも必ず杖は返さなければいけないです」

男は傷ついた体を起こして、涙を流しながら杖を受け取りました。男が杖を一振りすると、男のただれた肌は元に戻り、目は見る見る生気を取り戻して行きました。そして男は立ち上がり、「治った！ 治った！」と叫びながら喜びました。

「ありがとう、年老いたイルカよ。約束は必ず果たそう！」「デュフメルはイルカにそう礼を告げて、また魔法の杖を一振りすると、波を操りながら海を進んで行きました。イルカは幸福そうな顔をして見送ると、自身もまたデュフメルの起こした波の残りに乗って海を

漂つてこめました。

さて、魔法の杖を手にしたデュフメルですが、彼はそのやまざる欲を大いに叶えんとしました。杖の力で歎美な思いに浸りながら、自分はこんな力が欲しかったのだ、とつくづく思つたのです。彼は南の町に着くと、船からは下りずに南の町の海辺を眺めました。そして大声を上げました。

「者どもよ！ デュフメルが帰つたぞ！ 波に流され、太陽に焼かれ、怪物に襲われてもなお、この俺は死にはしなかつたのだ！」

南の町の住人たちはそれぞれがいつも通りに生活をしていましたが、その海に浮かぶ男の姿を見るや大いに驚きました。誰もがデュフメルはもう死んだと思っていましたから。

家々の中で一番大きな館の扉が開き、館の主人のアスローが姿を見せました。手には鋭い二股の鎌を持っていて、驚きと怒りが入り混じつたような顔をしています。アスローは海岸へ降りると勇敢に叫びました。

「愚か者のデュフメルよ！ どうしてお前は生きてあるのだ！ お前は我が妻を犯した挙句に殺した！ 僕はお前をこの手で殺してやりたかったが、せめてもの慈悲によって水神の元へお前の命を送つてやつたというのに！」

彼の言つ通りでした。デュフメルは罪人として海流しにされたのです。彼はよく回る舌を使って人々を騙していましたが、あるとき南の町一の館を持つアスローの妻フレディアを気に入つたデュフメルは、アスローに呼ばれているから家へと入れて欲しい、と妻を騙して館の中へ入り、フレディアへ乱暴した挙句に白い首を締め上げて殺してしまいました。それを見つけたアスローや町の住人た

ちの怒りはデューフメルを捕らえて、彼を海へ流してしまったのでした。

「もう一度、今度はこの手で殺してやろ！」アスローは猛々しく言いました。

しかしながらアスローは南の町の漁師の長であり、素晴らしい体格の持ち主で、力も強い勇敢な漁師でしたが、銛を持つ手は震えていました。海へ流されて生きていたものはいない。デューフメルはきっと淵界の王の僕となつたのだ、と彼は思いました。

デューフメルは冷徹な笑いを浮かべながら大きく手を左右に広げ、

アスローを見やりました。そして自分にこんな仕打ちをしたアスロー や南の町の住人たちに対して強く醜い憎悪を抱いたのでした。デューフメルは魔法の杖を力いっぱいに振り上げました。すると彼の背後から津波が彼を避けるようにやってきて、停めてあつた船を三艘、近くにいた住人もろとも飲み込み、海へ引きずり込んでしまいました。次に杖を振り上げると、海に割れ目のようなものが出来て、港へ向かっていた巨大な船をくつがえしてしまいました。乗員たちは海へと投げ出され、デューフメルに助けを求めるましたが、彼は決して助けようとはしませんでした。アスローは神の名前を叫びながらデューフメル目掛けて銛を投げつけましたが、銛は後一歩のところでデューフメルには届きません。デューフメルは背を向けて逃げるアスロー 目掛けて杖を振りました。海の水は鋭い鞭となつてアスローに襲い掛かると、彼の足をさらい、海へ引きずりこみ、勇敢な漁師は二度と浮いてはきませんでした。

その後もデューフメルは津波を起こして町を襲い、老若男女関係なく大勢の人々が命を落としました。デューフメルはそれを嘲笑しながら陸へ上がり、金品や食料を奪つたりしました。また生き延びた人々の中から特に美しい女性を選んでさらい、樋突く者や気に入らない者はみな波にさらわせました。

「こんな姿は思いもよらなかつた」南の町へ辿り着いたイルカは嘆きました。「私は彼の命を救いたいと思つただけなのに、よもやデ

ユーフメルがこのよつたな行為に至るとは。おお、水の主人オランドよ、
全ては私の責任でござります。私が彼に杖を貸し与えたために大勢
の命が奪われました。彼の命はあそこで尽きるべきものでした。私
の命はもうじき尽きる運命にあります。この命を賭して彼を説得に
当たります。どうか力を貸し下さい」

デューフメルは港に泊めてあつた大きな船に食料やら黄金やらを積み込み、船の中に引きこもつたまま、十日間出てきませんでした。イルカは船のそばまで泳いで行つてデューフメルに伝えました。

「デューフメルよ。私はあのときのイルカです。あなたは欲の限りを尽くしているが、そうしたとて何と虚しいだけではないか?今ならまだ過ちは赦されるだらう。どうかオランダ様の杖を返していただき、私と共に許しを乞おうではないですか」

しかしデューフメルはイルカと交わした誓言を守らうとはせず、船の中からは聞こえるのは奇妙な呻きだけでした。もう一度イルカが呼びかけますと、やはり返事はありませんでしたが、代わりに呻き声と、それに何やら人の泣き声のようなものが聞こえてきました。

太陽が反転した後、デューフメルが身を隠していた船は轟々と音を立てて軋み始め、厚い船底に大穴が開き、船は傾きました。そしてその大穴から姿を現したものは巨大な海獣でした。体には群青色の鱗が輝き、巨大で長い蛇型の体をしていました。額からは極端に均整の取れていない一本の角が曲がって生えていて、首の周りには灰色の長いたでがみが海水に濡れています。燃えるような赤い目をしたその海蛇は水面を打ちつけながら唸り声を上げました。

その海獣の正体はデューフメルでした。彼は年老いたイルカの好意によりオランダの杖を手に入れて命を落とさずにすみました。けれども後におじつて、欲と憎悪に溺れ、見境なく杖を使用したために、その魔力に飲み込まれました。彼はこの杖さえあれば自分も神々の仲間入りを果たせたと思い込んだとさえ言われています。けれどもその魔力は普通の人間に耐えられるものではなく、オランダの加護

が必要でした。そのため彼は杖の毒をまともに吸い込み、終には巨
大な海蛇になってしまったのです。

デュフメルは狂氣してのたうち、そのうねりは波を起こして大地
を洗いました。

この海蛇の暴走を止めたのは水神オランドでした。彼は海に投げ
出された魔法の杖を呼び戻すと、強い魔力のあるまじないをぶつぶ
つと呴きました。するとデュフメルは途端に大人しくなりました。
水の主は息子のアウロスに命じると、アウロスは大海蛇デュフメル
に魔法の首枷をはめました。

「バス」オランドはイルカを自分の下へ呼びつけて言いました。「
私の杖をこともあろうに他の者へ譲り渡すなど、決して赦すことの
出来ない行為だ。ましてやそれは罪人であり、これによつて失われ
た多くの魂は海をさ迷うだらう」

「申し訳ございません、オランド様」イルカは泣きながら罪を詫び
ました。「私はいかなる罰も受けます。しかしお聞き下さい。私は
ただ彼の命を救いたかっただけなのです」

「分かつていい」オランドは答えました。「お前は心の優しいイル
カだ。そして今回のこと私は責が全くないわけでもない。私はお
前を咎めたりはしたくないが、お前に懺悔の心があるのであれば、
海にさ迷う魂の道標となるがよい。そしてこれからお前はターネラ
と名乗るがよい」

ターネラは水神の提案を快く受け入れると、オランドの力によつ
て白く輝くイルカとなり、暗い波間を泳ぎながら、さ迷える魂たち
のただ一つの導となりました。デュフメルはアウロスによつてその
気性を抑えられ、彼の僕となりました。そして今も罪を償わんと南
の海をさ迷い続けています。

カイエンとトゥアレ その一

その頃の人間たちは神々の住まう土地より遙か東に住んでいました。人間は動物のように強靭な肉体や鳥のような自由な翼を持つではありませんでしたが、新しいものを生み出す知恵がありました。その知恵のために人間は最も繁栄しました。

彼らは大勢で集ることにより弱さを補い、幾つかの国を作りました。その国々の中で最も大きかつたのが、カイエン王が建国したアバトロでした。

アバトロはディフィー・ロ（マストロ）神により守られており、真理と正義が溢れていました。またカイエン王とその有能な家来たちにより法が定められていましたので、力による統治はありませんでした。法律は幸福のためのものであり、それは威嚇や懲罰のためのものではなく、人々が協力をして暮らそうとする意思であったのです。しかしながら光あるところに影が出来ると申しますように、大勢の人間が集まれば奸智や暴力といった罪悪が生まれるのは止められないものです。そのときはカイエン王は法の下で罪人を厳しく罰しました。カイエンは王となつてからその生涯を人々の為に尽くしましたので、彼は大勢の人々から慕われました。

（一説によるとカイエンは淵界に住む八人の淵王の一人デモロと契約していたといわれています。デモロは黄金の館に住む老人の姿をした淵王で、浪費の象徴であるとされますが、カイエン王がこの世のものとは思えないほどの輝きを放つ黄金の剣を常に腰に携えていたからでした。これがデモロのもたらしたものといわれているのです。しかしながらカイエン王の黄金の剣は怪物を倒したときにその

血溜まり中から拾い上げられたともされています。真相は分かりませんが、どちらにせよカイエン王はディフィー口の加護を得ていたわけですから、淵王デモロと契約を結んでいたとは考えにくい話ではあります）

カイエンはもともと東の園の外れに住む獵師でしたが、彼の血筋は神によって生み出された最初の人間アビオの血筋でした。カイエンはクレイという街の王トゥアレとその妻イリスの間に生まれた唯一の息子であります。トゥアレとイリスは初めての子供の誕生に大層喜びましたが、ある信託によりこの子供の存在は街を不幸へと導き、最期にはトゥアレの命を奪うであろう、と戒められました。トゥアレは馬鹿馬鹿しいと相手にはしていませんでした。しかし次第に街には飢饉と疫病が広がり、街に新しく生まれた子供は全て死んでしまいました。

思い悩んだトゥアレはこの赤ん坊を殺すことに決めました。そしてトゥアレは妻のイリスを呼んで、赤ん坊を一番高い北の崖より突き落とすように命じました。イリスは子供を殺そうと崖の上まで来ましたが、赤ん坊の眠りがあまりにも安らかであり、いとおしくなつた為に殺すことが出来なくなりました。だからといってこのままにしておけば街は飢饉と疫病によりどんどん蝕まれていってしまいます。そこで彼女は赤ん坊を榆の木の下に隠し、赤ん坊を包んでいた布で藁を包むとそれを崖の下へ放り投げたのでした。

「私は赤ん坊を殺しました！愛する私の息子です！これで飢饉と疫病を取り去ってくれるでしょうか？」イリスは天に向かつて大きく叫びました。

イリスは赤ん坊の命を助けましたが、連れて帰るわけにはいきません。彼女は赤ん坊を身に纏っていた赤く薄い布で包み、泣く泣く赤ん坊をその場に捨て置きました。こうしてクレイの災厄は取り除かれたのです。

それから間もなくして街外れの猟師オレストが森の中でこの赤ん坊を見つけました。

「おお、赤い幼子よ。お前は榆の木の根元より生まれた子供か？それとも天より降ってきた御子なのか？」

オレストはその場にしゃがみ込み、赤ん坊を抱き上げようとした。しかし赤ん坊はどんなに力を込めて持ち上げようとも動きません。それは赤ん坊が榆の木の幹を、その小さな手でしっかりと握っているからでした。オレストがその手を解こうとしますが、やはりびくともしません。岩のように堅く握っていたのです。驚いたオレストは目を見開き、感心しながら言いました。

「何と力の強い子供だ。お前は神なのか？そうではないのならきっと素晴らしい猟師になる。だがここにいては榆の木の根っこに食べられてしまうだろう。このわしと一緒におりでなさい。矢の構え方と『』の引き方を教えよう。動物の息づかいを教えよう。森の歩き方と水の位置を教えよう。季節の色を教えよう。お前に勇気を教えよう」

言い終わるや赤ん坊は嬉しそうに笑いました。それを見てオレストがもう一度赤ん坊を持ち上げますと、今度は素直に抱きかかえることができました。

こうして彼は赤ん坊を自分たちの所へ連れ帰り、育てることに決めたのです。そして赤ん坊にカイエンという名を与えました。彼らには一人娘がありました。猟師夫妻はカイエンのことも娘と同じくらい大切に育てました。

カイエンとトゥアレ その一

月日は流れ、獵師夫妻の元で育つたカイエンは立派な青年になりました。堂々とした体格で頭もよく、しかし優しい性格でした。彼は父の後をついで獵師となりました。

それからしばらくの後のことです。クレイの街に夜な夜な現れては民家を荒らし、人々を襲う怪物が出るようになりました。それはブライグルと呼ばれる怪物で、雄牛くらいの大きさの黒い狼の姿で、両目とも閉じていましたが、非常によく利く鼻と鋭い牙と爪を持つていたために、どこに隠れても必ず見つけ出されて殺されました。街の兵隊が守護に当たりましたが、ブライグルは暗闇の中から現れては兵隊を襲い、しかも矢や槍が通じず、兵たちには成す術がありませんでした。

「怪物を倒せるものを集めよ。身分や年齢などは何も問い合わせしない」
クレイの王トウアレは言いました。「もしもこれを見事仕留めることが出来るたのならば、わしの養子として迎え入れよう。わしには子供は一人もない。養子となれば、後継者としていざれこの街を治めることが出来るぞ」

トウアレの言葉にクレイの街のみならず、他の街からも大勢の候補者が集まりました。誰もが腕に覚えのある男たちです。そしてその中にはカイエンの姿もありました。

彼らは早速クレイの街の警護に当りました。ある者は屋根の上で息を殺して矢をつがえ、ある者は門の前で槍を構えて立ち、ある者は松明を幾本も持つて警護に当りました。カイエンはというと街の中で一番高い高台に上つて様子を眺めていました。

誰もが怪物の討伐を心待ちにしていました。しかしこだけの人

数を集めてもブライグルは止められませんでした。集められたものたちは次々に命を落とし、一晩で人数は半分となりました。そして次の日にはそれはさらに半分となりました。そして集められたものはわずかに五人となつたとき、その内の四人は狩りを辞退してクレイの街を去りました。残つたのはただ一人、カイエンだけだったのです。

「お前も他のものと同じようにこの町を見捨てて去つて行くのか？」トゥアレは尋ねました。

カイエンは坦いだ弓に手を当てて答えました。「私は去りません。私が怪物を仕留めてご覧に入れましょう」

トゥアレは笑いました。「この大人数でもブライグルは仕留められなかつた。どうしてまだ若いお前がたつた一人で仕留めようと言うのか？」

「私はこれまで町の高台に登つて怪物の様子を見ていました。奴は暗闇より現れて暗闇へと帰ります。暗闇の中では我々は何も見えません。しかしながら我々が明るみにいれば、怪物は襲うために明るみの下へ出なければなりません。そのときが怪物を仕留める好機なのです」

そうやってカイエンが自信ありげに話すので、トゥアレはだんだんこの若者ならばブライグルを仕留められるに違いない、と思うようになりました。トゥアレは椅子に肩肘をついて鼻を鳴らしました。「お前が怪物を倒したのなら、わしの息子として受け入れるとしよう」

しかしトゥアレがそう言つたのも束の間、カイエンは首を振つて断りました。

「いいえ、報酬は何もいりませぬ。私が怪物を倒そうというのは、この街が欲しいからではございません。怪物によつて私の両親や姉が危険に犯されるのを恐れるからでございます。仕留めたからといつても褒美は何もいりません」

トゥアレはこの物言いに大層興奮して腹を立てましたが、同時に

この若者を気に入りました。そしてその代わりに若者にこの街で一番の駿馬を与えることを約束しました。これにはカイエンも納得して受け入れたのです。

その夜、カイエンは誰もが寝静まつた街の中央の広場に一人立てていました。右手には赤々と燃える松明を持ち、左手には弓を携えていました。そして黒い雲が月の明かりをゆっくりと消し去り、カイエンが息を呑んで見上げたそのとき、暗闇から不気味な唸り声が聞こえてきたのです。カイエンは振り返つて暗闇に松明を向けました。すると轟々という雷のような咆哮と共にブライグルがカイエン目掛け飛び掛つてきました。カイエンはそれを寸でのところで横に飛んで交わしましたが、鋭い爪はカイエンの肩を裂いていて、その傷口からは血が流れました。

カイエンはブライグルの正面に立派に立ちはだかつて声を上げました。

「俺の名はオレストの息子カイエン！ 残忍な怪物よ、今日こそこの俺がお前を仕留めよう！ だがもしもこのままこの場を去るというのなら命だけは助けてやろう！ さあ、どうする…」

ブライグルはカイエンの言葉には耳も貸さずに、彼を食べることで頭がいっぱいになつていきました。そしてカイエン目掛け飛び走り始めました。カイエンは咄嗟に手にした松明を広場の床へ投げ捨てました。すると炎は広場の石畳の隙間に流し込まれた油を伝つて一気に燃え広がりました。そして炎は広場を囲むようにして環状に燃え盛りました。

驚いたのはブライグルです。彼には熱さもありましたが、それよりも突然鼻が利かなくなつたのです。それはカイエンが事前に広場の周りに燃やすと強い臭いを放つマロミと呼ばれる植物を仕掛けたいたからでした。

カイエンは動きの止まつたブライグルの口の中目掛けで矢を放ちました。矢はブライグルの口に刺さり、怪物は悶えました。いくら皮膚が硬くとも、口の中はどうしようもなかつたのです。さらに力

イエンは走り寄つて、首の毛と毛の隙間目掛けて思い切り剣を突き立てました。剣は怪物の首に深々と突き刺さった後、根元から折れました。怪物はなおも立ち上がり絶叫が街を震わせました。そしてついに怪物は自らの流した血溜まりの中に倒れて死にました。

クレイの街の王トウアレや人民は怪物の脅威が去つたの大層喜んで、彼を英雄に仕立て上げようとしたが、彼はそれをお望まずに、約束の駿馬を受け取つて自らの家族の元へと帰つて行きました。

後になつてクレイの街は発展し、それは国となりました。しかし平和となつたクレイだったのですが、悲しい出来事が起きました。それはクレイの王トゥアレの妻イリスの死でした。イリスは運悪く石段を踏み外してしまったのです。

クレイの人々はひどく悲しみましたが、最も悲しみが深かつたのは夫のトゥアレでした。彼は長い間涙を流し、ついに涙が枯れると、今度は神々を恨むようになりました。特に運命を司る神ホウエルを大層恨みました。

「何という運命なのか！ ホウエルよ、そなたの定めた運命は恐ろしく残忍で、ひどく醜悪だ！ さあ妻を返せ！ 妻を返せ！ さもなくばわしはお前たちを許しはしないぞ！ わしは昔、神託の通りに我が子を殺したではないか！ その仕打ちがこれとは、いくら神々のしたこととはいえ、よくもやつてくれたものよ！ わしは力を持つて必ず妻を取り返してやる！」 トゥアレはそうやつて天を罵りました。

それからというものクレイを支配するもの、それは暴力でした。愛や理性が最期まで戦いましたが結局は暴力に破れてしまい、力のない女や子供や老人は涙を流しました。街には淵王への信仰が溢れ、神々への崇拜は消え行くばかりです。トゥアレは気が触れたかのように暴政を働くと、さらには多くの兵隊を集めて他国へ戦争を仕掛け、大地を殺戮の血で汚しました。

そんな人間の行為を見た大地母神セレナは悲しみに暮れ、太陽神ディフィー口は憤り、人間たちを滅ぼすことを決めたのでした。これには他の神々も了承しましたが、そんな中でただ一人運命の神ホウエルだけは計画を待つように申し出ました。

「全ての人間に罪があるわけではありません。私の運命の秤を見でいただきたい」ホウエルは言いました。そうして手にした純白の秤を皆の前に差し出したのです。「運命の秤はまだ人間が滅びるときではないと告げています」

太陽神は椅子に深々と腰掛けで深く悩みました。

「しかし人間の行動は目に余る。誰が我らに知恵を求めるのか？人間どもは我らへの信仰を忘れ、欲望のままに大地を血で濡らしているではないか」

「その通りです」ホウエルは言いました。「しかし同時にそうではないとも言えましょう。我らは大きい、故に見ることが出来るのはその大局でしょう。人間たちの中にもまだ守るべきものはいます。それはとても小さいのです。そして凶星は暴君トゥアレにのみ出でおります。人間全てではございません」

ホウエルが言い終わるとティフィー口はますます悩みました。

「はどうするというのだ？」

ここで進み出たのは知恵と予言の神モンドでした。

「私にお任せ下さい。私の示した古い神託がまだ生きております。この神託はある人間により誤魔化されましたが、私はこれに強い母愛を感じ見守つてきました。ですが今まさにこの神託が叶えられるときなのでしょう。ホウエルの言う運命とは今なのです。導かれた人間が解決させるでしょう」

「ではその人間とは誰だ？」

「それはクレイの國の獵師カイエンです。カイエンは最初の人アビオの血筋。勇敢な若者です」

「しかしそれではトゥアレとは親子という絆。親殺しは重罪だ」

「心配には及びません。トゥアレはカイエンとの絆を自ら解消しました。それに悪意を断ち切るには・・・それは身内がよいでしょう」太陽神はモンドの言葉にうなづきました。それから他の神々をぐるり見渡しました。すると他の神々も納得したようにうなづいています。太陽神は少し安心しました。実際、誰も人間を滅ぼしたいな

どと本気で思いはしていなかつたのです。太陽神は今一度だけ人間たちに機会を与えることにしました。

「ではモンドよ。ホウェルの示した運命にのつとり、人間に神託を示すのだ」太陽神は告げました。そして広間を後にし、空高くへあつという間に昇つて行きました。

モンドは預言者の老人へと姿を変えてクレイへ赴きました。そしてその街外れに住むカイエンの元へ行き、彼に神託を告げました。それは次のようなものでした。

大地は血で濡れている。赤い涙を流している。それは暴虐を尽くす王トウアレの指導によるものである。闇よりの怪物ブライグルを討ち取った勇士カイエンは、民衆を指導し、この暴君を殺さなければならぬ。さもなくばいずれ人の命は絶えて、大地は砂と乾いた風のみが支配するだらう。

カイエンはこのお告げを聞いて困りましたが、彼を奮い立たせたのは姉のヴェルマのこんな言葉でした。

「あなたにしか出来ないのであれば、あなたがやるしかない。その力をあなたは持っているのだから、あなたがやらなくてどうするの？私たちは私たちにしか出来ないことがあるのだから、あなたの手助けをしますよ」

カイエンは家族の顔を見ると、力が湧き上がりつて来るのを感じました。そして彼はトウアレを討つことを決心しました。

この後でカイエンは民衆を率いてトウアレを打倒します。そしてこの場所に新たにアバトロという国を築いて、彼は王となりました。アバトロは発展し、カイエン王の孫のルカス王のときに最盛期を迎えました。アバトロの神殿の祭壇には一本の杖が地面に埋まるよう

に突き立てられており、これを手にするものはいざれ新たな指導者となるだろうと言われています。

まだ赤ん坊だったカイエンは死ぬことなく生かされ、後になつて父王トウアレとクレイの国を滅ぼすこととなります。結局トウアレに与えられた神託は形を変えて彼のところに戻つてきましたことになります。ところでカイエンはトウアレを殺したとき、彼の亡骸を國中で一番高い、見晴らしの良い丘の上に埋めたということです。しかししながらカイエンがトウアレを自分の父親だということに気がついていたかどうかは分かりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5313i/>

ヴェルダ神話物語

2011年11月12日01時06分発行